

的場古墳群



2001

津山市教育委員会

的場古墳群

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第70集

2001

津山市教育委員会



的場 1号墳全景



的場 2号墳と建物跡



的場 3 号墳全景



35



39



42

的場 2 号墳出土馬具

序 文

ここに報告する的場古墳群は、市内を貫流する吉井川沿いに位置する津山市金屋地区に所在します。

平成10年10月17日の夜から18日の朝にかけて岡山县に上陸した台風10号は、各地に大きな被害を与えました。なかでも津山市の被害は特に大きく、吉井川、皿川などの河川沿いを中心に3,206戸の家屋が浸水するという深刻な事態となりました。本地区も例外ではなく、多くの農地や道路が甚大な被害を受けました。そのなかで、一頭の子牛がはるか下流の瀬戸内海まで流されながらも奇跡の生還を果たした出来事は、津山市民に大きな励ましと勇気を与えてくれました。この子牛が住んでいたのが本地区的牧場です。

このたびの調査は、護岸工事とそれに伴う牧場整備が契機となりました。対象となった古墳は工事計画の策定後に発見されたため、応急の発掘調査となりましたが、予想以上の成果を得ることができました。これまで、この地区の埋蔵文化財についてはあまり良く知られていませんでしたが、本調査を通じて金屋地区にも重要な古墳群が存在することがあきらかになりました。本書が地域の歴史を知るために基本資料として利用されれば幸いです。

終わりになりましたが、調査にあたってご理解と積極的なご協力をいただいた地権者を始めとする地元関係各位に対し、敬意を表するとともに心からお礼申しあげます。

平成13年3月31日

津市教育委員会
教育長 松尾 康義

本文目次

| | | |
|-----|------------|----|
| I | 位置と環境 | |
| 1 | 遺跡の立地 | 1 |
| 2 | 周辺の遺跡 | 1 |
| II | 調査の経過 | |
| 1 | 発見経過と調査契機 | 5 |
| 2 | 調査の経過 | 5 |
| III | 調査の記録 | |
| 1 | 古墳群の概要 | 7 |
| 2 | 1号墳 | 9 |
| A | 墳丘 | 9 |
| B | 周溝 | 12 |
| C | 石室 | 12 |
| D | 遺物の出土状況 | 13 |
| E | 出土遺物 | 13 |
| 3 | 2号墳 | 19 |
| A | 墳丘 | 19 |
| B | 周溝 | 19 |
| C | 石室 | 20 |
| D | 箱式石棺 | 22 |
| E | 遺物の出土状況 | 22 |
| F | 陶棺 | 23 |
| G | 出土遺物 | 27 |
| 4 | 3号墳 | 32 |
| A | 墳丘 | 32 |
| B | 周溝 | 32 |
| C | 石室 | 32 |
| D | 遺物の出土状況 | 33 |
| E | 出土遺物 | 35 |
| 5 | 中世の遺構・遺物 | 38 |
| A | 建物跡 | 38 |
| B | 出土遺物 | 39 |
| IV | まとめ | |
| 1 | 古墳の築造と埋葬時期 | 40 |
| 2 | 古墳群の特徴と問題点 | 45 |

挿図目次

| | | | | | |
|------|-------------|----|------|-----------|----|
| 第1図 | 的場古墳群と周辺の遺跡 | 2 | 第18図 | 箱式石棺実測図 | 22 |
| 第2図 | 的場古墳群分布図 | 3 | 第19図 | 2号墳遺物出土状況 | 22 |
| 第3図 | 的場古墳群調査区全体図 | 7 | 第20図 | 陶棺実測図 | 24 |
| 第4図 | 的場古墳群採集遺物 | 8 | 第21図 | 2号墳出土遺物1 | 25 |
| 第5図 | 1号墳平面図 | 9 | 第22図 | 2号墳出土遺物2 | 26 |
| 第6図 | 1号墳墳丘断面図 | 9 | 第23図 | 2号墳出土遺物3 | 27 |
| 第7図 | 1号墳石室平面図 | 10 | 第24図 | 2号墳出土遺物4 | 28 |
| 第8図 | 1号墳石室実測図 | 11 | 第25図 | 2号墳出土遺物5 | 29 |
| 第9図 | 1号墳遺物出土状況 | 12 | 第26図 | 2号墳出土遺物6 | 30 |
| 第10図 | 1号墳出土遺物1 | 14 | 第27図 | 2号墳出土上鉄津 | 31 |
| 第11図 | 1号墳出土遺物2 | 15 | 第28図 | 3号墳平面図 | 32 |
| 第12図 | 1号墳出土遺物3 | 16 | 第29図 | 3号墳墳丘断面図 | 32 |
| 第13図 | 1号墳出土遺物4 | 17 | 第30図 | 3号墳石室実測図 | 34 |
| 第14図 | 2号墳平面図 | 19 | 第31図 | 3号墳出土遺物1 | 36 |
| 第15図 | 2号墳断面図 | 19 | 第32図 | 3号墳出土遺物2 | 37 |
| 第16図 | 2号墳石室実測図1 | 20 | 第33図 | 建物跡・土坑実測図 | 38 |
| 第17図 | 2号墳石室実測図2 | 21 | 第34図 | 出土銭貨拓影 | 39 |

表目次

| | | | | | |
|----|-------------|----|----|-------------|----|
| 表1 | 出土銭貨一覧表 | 39 | 表3 | 2号墳出土須恵器観察表 | 43 |
| 表2 | 1号墳出土須恵器観察表 | 42 | 表4 | 3号墳出土須恵器観察表 | 44 |

写真図版目次

| | | | |
|-------|-------------------|------|------------------|
| 表紙写真 | 的場古墳群（上空から） | | |
| 巻頭図版1 | 的場1号墳全貌、的場2号墳と建物跡 | | |
| 巻頭図版2 | 的場3号墳全貌、的場2号墳出土馬具 | | |
| 図版1 | 調査区全貌・1号墳 | 図版6 | 1号墳出土土器 |
| 図版2 | 1号墳石室・遺物出土状況 | 図版7 | 2号墳出土土器 |
| 図版3 | 2号墳 | 図版8 | 2・3号墳出土土器 |
| 図版4 | 2号墳遺物出土状況・石室 | 図版9 | 1号墳出土鉄製品・2号墳出土馬具 |
| 図版5 | 3号墳・建物跡 | 図版10 | 2・3号墳出土鉄製品・耳環・陶植 |

例　　言

- 1 本書は牧場造成工事に伴う的場古墳群の確認調査報告書である。
- 2 調査は平成10年度から平成11年度にかけて、津山市教育委員会が実施した。
- 3 的場1号墳から3号墳までの3基を調査し、これらの行政区画は岡山県津山市金屋字的場367番地の1ほかに所属する。
- 4 調査は津山市教育委員会文化課が担当し、中山俊紀、安川豊史、行田裕美、平岡正宏、豊島雪絵があたった。
- 5 調査にあたり、本文中に記すとおり多くの方々から援助や教示をいただいた。
- 6 調査には第V直角平面座標系を使用した。本書第3図で使用した方位は座標北を示し、高さは海拔高である。
- 7 本書の執筆は津山弥生の里文化財センター職員が分担した。執筆分担は次のとおりである。中山（I）、行田（III-3-A B C）、平岡（III-2-A B C・5-A）、豊島（III-2-D）、その他の執筆と編集は安川が担当した。
- 8 出土遺物および図面等は津山市教育委員会津山弥生の里文化財センターに保管している。また、本書の内容はPDFファイルとして保管している。広く活用を望む。

I 位置と環境

1 遺跡の立地

的場古墳群は、津山市南東端の金屋に所在する。津山市街地中心部の吉井川にかかる今津屋橋南詰から、川沿いに主要県道津山橿原線を南東に3.5km進むと、国道53号線の新兼田橋東詰から国分寺を南下し橿原に抜ける県道と渡船場橋で合流する。その合流点南西に広がる集落が金屋で、的場古墳群は、その合流点から橿原方面にやや南下した吉井川右岸の山裾に開けた狹小な段丘上に存在する。

金屋の地は、古代の行政区画として美作國久米郡に属していたとみられるが、吉井川対岸の瓜生原など、勝出郡に属する河辺地域一帯との結びつきも伝統的に強かったようである。占墳群の西には、背後に標高351mを最高所とする山塊が迫り、南は橿原町と境する峡谷となっている。

吉井川を挟んで北方に開ける河辺の台地には、日上天王山古墳⁽¹⁾や美作國分寺跡⁽²⁾、同尼寺跡⁽³⁾など美作を代表する遺跡が集中し、弥生時代以降特色ある地域圏を形成している。

2 周辺の遺跡

この地域における古墳時代の開始を物語るものに、日上の歛山丘陵南端、吉井川を見下ろす位置に築造された前方後円墳日上天王山古墳が存在する。日上天王山古墳は、平成6年に発掘調査が実施され、墳長57mで、後円部三段、前方部二段で並石をもって築成されていることが明確となった。前方部は低くバチ形にひらき、整った墳形は箸墓古墳や岡山市の浦間茶臼山古墳と類似する。この歛山丘陵には、56基の小墳が遺存する歛山古墳群があって、この大多数は5世紀後半から6世紀前半に築造されたいわゆる古式群集墳であること、尾根筋に天王山古墳に繼起する前半期の方墳が少数存在することが、平成7年度から9年度に行われた確認調査で明らかとなった⁽⁴⁾。

古式群集墳の時期の30mを越す規模の古墳として、河辺地域には井口車塚古墳⁽⁵⁾（帆立貝形、全長35m）、国分寺飯塚古墳⁽⁶⁾（円墳、直径35m）、日上歛山80号墳⁽⁷⁾（前方後円墳、全長30m）等が代表的なものとしてあるが、この他直径ないしは一辺10mから20mほどの小円墳ないしは方墳多数も、群はないしは点在して広く分布する。

それらのうち日上歛山古墳群を西のグループとすれば、それに対応する東方グループの群集墳代表には長歛山古墳群⁽⁸⁾（8基）、長歛山北古墳群⁽⁹⁾（12基）が存在する。長歛山古墳群は、昭和46年度に1、2号墳が調査され、うち2号墳の木棺直葬で裸床をもつ埋葬施設から鉄錐、鉄槌などの鍛冶工具が発見された。また長歛山北古墳群も、平成2年度と6年度の2度にわたり発掘調査が行われ、3号墳では、木棺直葬の埋葬施設から鉄剣や鉄錐とともに馬具が副葬されていた。

これら一群に先行する古墳が広戸川対岸の丘陵上に点在するが、そのうちの一つ西吉田北1号墳（方墳、辺10m）では、箱式石棺からも鉄錐や鑿などの鍛冶工具が発見され⁽¹⁰⁾、また一貫西3号墳（方墳、辺8m）には在地製作されたとみられる馬具が副葬されていた⁽¹¹⁾。

鍛冶工具などが古墳に副葬されること、古式群集墳のありかたなどから、これら群集墳の被葬者集団は、鉄製品加工を含む技術者集団としての性格を強くもっていたのではないかと推測されている。

この地域のその頃の古墳には、鉄製品が一般に多く副葬される傾向があつて、飯塚古墳北東に位置す



第1図 的場古墳群と周辺の道路(国土地理院1:25,000「津山東部」)

| | | | | | |
|-----------|-----------------|-------------------|------------|------------|------------|
| 1 的場古墳群 | 2 川崎六ヶ城古墳群 | 3 玉串大塚 | 4 旗張遺跡 | 5 伊人塙田遺跡 | 6 井口車塚古墳 |
| 7 天和原1号墳 | 8 河道上郡古墳群 | 9 国分寺坂塚古墳 | 10 日上郡山古墳群 | 11 日上天王山古墳 | 12 美作國分尼寺跡 |
| 13 美作国分寺跡 | 14 河道小学校裏古墳群 | 15 長嶺山古墳群 | 16 長嶺山北古墳群 | 17 西吉田北1号墳 | 18 荊山古墳群 |
| 19 真西古墳群 | 20 一眞東古墳群 | 21 小森古墳群 | 22 勝谷古墳 | 23 大淮古墳群 | 24 クズレ塚古墳 |
| 25 能万寺古墳群 | 26 名称未定(横穴式石室塚) | 27 名称未定(横穴式石室塚2基) | | | |

る上原1号墳（円墳、直径16m）の礫標、2号墳（円墳、直径11m）の直幕木棺からも多数の鉄製品とともに鉄製馬具が発見されている^[12]。なお、特異な鉄器として、西吉田北1号墳から鉄鋸が、また上原3号墳（円墳）から舶載とされる鈎・鍛造鉄斧が発見されている。

この地域には横穴式石室墳はあまり知られておらず、加茂川右岸の能万寺古墳群^[13]、井口車塚古墳南西部に位置する天神原古墳群^[14]、長畠山古墳群の南東部に位置するクズレ塚古墳^[15]、柳谷古墳^[16]など6世紀後半から7世紀前半に築造されたものが少数知られているにすぎない。その分布も、国分寺跡や国分尼寺跡を中心とみれば外延部に位置し、古式群集墳の立地と対称的である。

そのうちの一つ天神原1号墳は、昭和28年に土取工事中に発見された横穴式石室墳で、応急調査されたため正確な規模などは分からぬが、無袖式石室で石室内から陶棺2体、木棺1体の埋葬が発見された。副葬品に金銅装の双竜環頭大刀がある。クズレ塚古墳は、東西12m、南北9mの円墳で、長さ9m、幅1.1~1.8mの無袖式の石室が染かれており、陶棺1体が内蔵されていた。古く盗掘され、詳細は明らかでないが、昭和62年度の津山市教育委員会の調査で、提瓶などの少数の須恵器や瓶、金環、鉄鎌などが発見されている。なお、クズレ塚古墳北西の山間の谷あいに位置する柳谷古墳も、同年度の中核工業団地造成に伴う発掘調査で発見されたもので、墳丘規模は、南北7.5m、東西5.6mで、石室も奥行き復元長3.3m、幅約80cmと極めて小さい無袖式の石室をもつた古墳であったが、石室内から銀象嵌亀甲紋が施された頭椎大刀が発見されている。同じ工業団地造成に伴い発掘調査された一貫西遺跡^[17]では、7世紀から8世紀にかけての製鉄遺構が発見され、工房とみられる撲立柱建物跡など多数も検出されている。

的場古墳群は、知られている8基の古墳すべてが横穴系石室墳とみられ、位置的にみても、クズレ塚古墳や柳谷古墳などとの関連が考えられる。律令体制形成過程を考える上で、重要な位置付けが与えられよう。

文献

- 1 「日上天王山古墳」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第60集 津山市教育委員会 1997
- 2 「美作国分寺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第2集 津山市教育委員会 1980
- 3 「美作国分尼寺跡発掘調査報告書」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第12集 津山市教育委員会 1983
- 4 「日上柳谷山古墳群」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第63集 津山市教育委員会 1998



第2図 的場古墳群分布図（縮尺1:5,000）

- 5 「井口車塚古墳」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第52集 津市教育委員会 1994
- 6 今井亮『津山市史』第1巻原始・古代 津山市 1972
- 7 近藤義郎・今井亮『群集墳の発行』『古代の日本』第4巻 角川書店 1970
今井亮『津山市史』第1巻原始・古代 津山市 1972
- 8 「長歟山2号墳出土の資料について」『年報津山弥生の里』第3集 津市教育委員会 1996
- 9 「長歟山2号墳群」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第45集 津市教育委員会 1992
『長歟山北11号墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第57集 津市教育委員会 1996
- 10 「西吉山北遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第58集 津市教育委員会 1997
- 11 「一貫西遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第33集 津市教育委員会 1990
- 12 「河辺上原遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第57集 津市教育委員会 1994
- 13 今井亮『津山市史』第1巻原始・古代 津山市 1972
- 14 行田裕美・保田義治『津山市天神原1号墳』『古代吉備』第11集 古代吉備研究会 1989
- 15 「崩レ塚古墳群・クズレ塚古墳」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第31集 津市教育委員会 1990
- 16 「柳谷古墳」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第24集 津市教育委員会 1988
- 17 「一貫西遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第33集 津市教育委員会 1990

その他の文献

- 平岡正宏『河辺小学校裏古墳群発掘調査報告』『年報津山弥生の里』第5集 津市教育委員会 1998
『茶山古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第27集 津市教育委員会 1989
『一貫東遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第43集 津市教育委員会 1992
『小原遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第38集 津市教育委員会 1991
『大塙遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第47集 津市教育委員会 1993
『天神原遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(7)』岡山県教育委員会 1975
『日上和田古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第24集 津市教育委員会 1981
『日上小深山遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第66集 津市教育委員会 2000

II 調査の経過

1 発見経過と調査契機

岡山県教育委員会による県内遺跡詳細分布調査の初年度として、津山市分の調査が平成10年度から実施されることとなった。県教育委員会から協力依頼を受け、分布調査の未実施の部分について本市も共同で行うこととなり、平成10年11月から12月にかけて市内数カ所で分布調査を実施した。

この現地踏査の過程で、金屋地区においても既知の古墳以外にいくつかの古墳の存在が明らかとなり、代表的な小字名をとって的場古墳群と命名した。新しく発見された古墳の内2基については、土地所有者からの聞き取りによって、近く予定している造成工事の対象となっていることが判明した。

平成10年12月28日付けで、所有者の石岡 基氏から文化財保護法第57条の5第1項にもとづく遺跡発見届けが提出された。

造成工事は、台風10号により甚大な浸水被害を受けた牧場地の改良を目的とするもので、地盤高を上げるための造成用の土取り予定地に、古墳が存在するというものであった。2基の古墳はいずれも過去の畠地造成などによって半壊の状況であったことと、工事計画上、現状保存は不可能であると判断されたため、事前に確認調査を実施することとした。

2 調査の経過

対象地は樹木や笹などの繁茂が激しく、平成11年1月21日から伐採に着手した。1号墳と2号墳の周辺を伐採した後、2月25日から1号墳の発操作業を開始した。

石室女室部には奥壁の巨石が倒れかかっていたので、これを重機で除去して石室内外の掘り下げを行った。発掘開始当初は、天井石は存在せず横穴式石室の中央部の石積みがわずかに残存していたのみで、墳丘も大部分は失われているように思われた。石室内を掘り下げる過程で、羨道部に閉塞装置と思われる石材の堆積状況が検出され、石材を露出させながらさらに掘り下げたところ、当初の予想以上に石室内が残存していることが判明した。

石室北西の山側は急斜面となっていたが、発掘の結果、墳丘と周溝がわずかに残存することが判った。北西以外の墳丘は残存していないかったが、石室に直行するトレーニングを設定して掘り下げたところ、石室の北東側には盛土層がかなり深く残存していることを認めたので、トレーニングを延長して盛土範囲を確認した。

1号墳の調査と併行して2号墳の発掘を開始した。発見当初はわずかに1枚の天井石が丘陵端部に認められる程度であったが、天井石南東側の崖面に側壁らしい石積みの存在を認めたので、古墳上面の掘り下げと同時に崖面の削り出しを行った。その結果、石室の大半が遺存し、新たに3枚の天井石が山側に存在することが判った。天井石を露出する過程で中世の土器等が出土し、墳丘盛土はほとんど残存しないことが明らかとなった。精査の結果、周溝の痕跡が山側にわずかに認められた程度であった。

石室入口側から掘り進めたところ、陶棺が存在することが判明した。陶棺の身は、ほぼ完形で原位置を保っていたが、入口側の蓋は遺存しない。奥側の蓋は破壊されて身の中に落下していた。天井石に支持用のポストを添えて調査を進めたが、側壁の残りが悪いことと陶棺の存在により作業が困難となり、

重機で天井石を除去して石室内の掘り下げを行った。石室内への流入土の除去の途中で多数の銅鏡が出土した。炭化物も同時に検出され、中世の段階において石室内が何らかの形で利用されたことを示していた。陶棺から炎の石室床面は荒らされておらず、副葬品が原位置のまま出土した。陶棺手前の東西側壁面に沿って箱式石棺が存在した。この周辺からも遺物が出土したが多くは攪乱を受けている。

2号墳の上面は、かつて畑として利用されていたが、墳丘に設置したトレーナーの観察から中世の遺物を含む厚い土層堆積が認められたので、調査区を拡張して掘り下げたところ、掘立柱建物跡1棟を検出した。また、調査の後半になって、2号墳の南西隣で重機を用い耕上作業をしていたところ、石室状のものを丘陵端部で検出した。広げて精査した結果、1基の古墳が半ば埋もれた状況で検出された。墳丘の南半部は過去の造成すでに失われていたが、中心の堅穴式石室はほぼ全形をとどめていた。

平成11年4月17日には現地説明会を実施した。地元住民を中心に約200名の参加があった。その後、実測等の作業を続け、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行い、4月30日にすべての発掘作業を終了した。

測量および発掘調査、遺物等の整理作業は下記の体制で実施した。

| | |
|--------------|-------------------------|
| 津山市教育委員会 教育長 | 松尾康義 |
| 教育次長 | 菊島俊明（11年度まで）、森元弘之（12年度） |
| 文化課長 | 永禮宣子（10年度）、森元弘之（11年度） |
| | 内藤正剛（12年度） |
| 文化財センター所 長 | 中山俊紀 |
| 次 長 | 安川豈史 |
| 主 査 | 行田裕美 |
| 主 任 | 小郷利幸 |
| 主 事 | 平岡正宏、豊島雪絵 |
| 嘱託員 | 野上恭子、岩本えり子、家元弘子（整理） |
| 臨時職員 | 上原香里、三谷淳子、仁木智子、上原恵美 |
| 学生アルバイト | 秦 愛子 |

現地の発掘等の作業は津山市シルバー人材センターにお願いした。作業従事者は下記の方々である。
(調査作業員) 稲垣裕史、梶尾嘉明、加藤文平、末澤敏男、高山 守、谷口末男、野口定男、

藤沢淳一郎、森二三夫

現地調査にあたっては、地権者をはじめとする下記の方々のご協力をいただいた。記して感謝いたします。

石岡牧場、石岡 基、右岡儀則、久保 恭、久保 博、久保農夫雄

発掘調査ならびに整理作業の過程で、下記の先生方および諸氏、機関からご教示いただいた。記して感謝いたします。

近藤義郎、河本 清、土居 徹、亀田修一、福田正継、中野雅美、渡邊恵理子、岡山県古代吉備文化財センター

III 調査の記録

1 古墳群の概要

的場古墳群は、現状では8基の古墳からなる群集墳である。今回の調査の過程で、1号墳の南西には、かつて2基の古墳が存在したことを知った。2基はいずれも円墳で、横穴式石室をもっていたという。これらの古墳は、約80mから110m付近までのほぼ同じ標高沿いに、南東に向いた丘陵端部または斜面に立地する。平面分布は、南西から北東にかけて帯状をなし、今回発掘調査を実施した1・2・3号墳から北東に向かい順に古墳番号を付けた。分布の両端をなす1号墳と8号墳の直線距離は250m程度である。

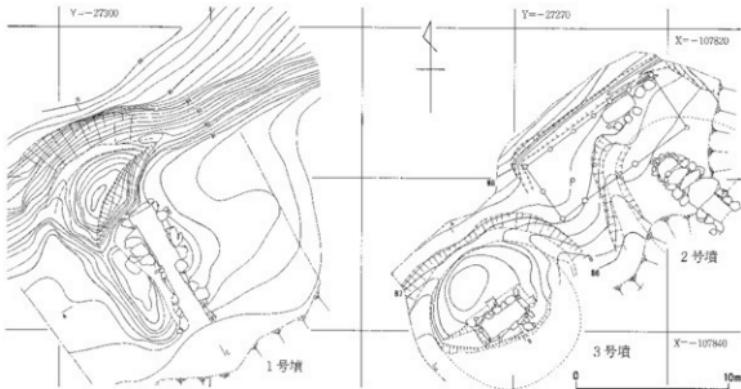
今回の調査対象となった古墳は、古墳群の西端に位置し、西から1号墳、3号墳、2号墳の順に並ぶ。山裾の丘陵端部に所在する（第3図）。

以上の古墳のうち、5分墳は今も水田のなかには完全な墳丘を残し、金屋を代表する古墳として知られてきた。さらに8号墳までは、その存在が地元民によって認識されていた。5号墳と6号墳からは遺物も採集されていて、今回の調査時に教示を受けるとともに遺物の寄贈を受けた。以下、遺物の説明を含め、発掘調査対象外の古墳について説明する⁽¹⁾。

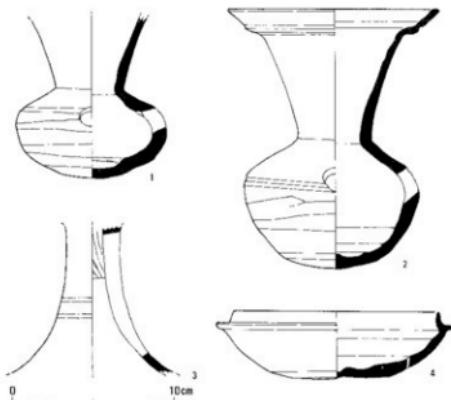
4号墳は、水田の斜面に不自然な高まりが残されているので、石が集積されている。確実に古墳であるかどうかは断定できない。

5号墳は直径約12mの円墳で、横穴式石室が南西に開口している。石室は無袖式で、現長8.5m、同幅1.9m、高さ1.9mである。石室内に箱式石棺の可能性がある板石が存在する。所有者の久保 梶氏によつて須恵器と陶棺の破片が採集されている。

須恵器には高壺脚台部の破片と甕の頸部以下の2個体がある。脚台（3）は、今回の調査時に石室内で採集したもので、9cm程度の高さをもち、2方に1段透しがある。甕（1）は、肩部付近までヘラ削



第3図 的場古墳群調査区全体図 (1:400)



第4図 的場古墳群採集遺物（1：3）

それもほぼ完形で、器の表面にはベンガラとみられる赤色顔料が付着する。器高4.2cmで、底部の調整方法は、全体を回転ヘラ削りするa手法に分類される。体部には棒状具による直径1.5mmの孔が底面側から焼成前に開けられている。

7号墳は道路により半壊されているが、古墳と考えられる高まりが認められる。

8号墳は半壊されていて、横穴式石室の一部が残存する。

以上の古墳の他にも、6号墳の南方の丘陵先端部にかつて古墳が存在したという伝えがあるほか、8号墳が所在する丘陵の上方に古墳が存在したという伝えもあるが、現状では確認できない。

以上のように、現在消失したものを含むると的場古墳群は总数10基以上の古墳からなる。内部主体の確認あるいは想定できるものはすべて横穴式石室のようで、墳形も円墳に限られるようである。こうして横穴式石室を埋葬主体とする古墳の群集としては、津山市内でも有数のものである。

訃

1 以下の古墳の記述にあたっては、岡山県古代吉備文化財センターが実施した遺跡分布調査データを参考にさせていただいた。記して感謝します。

りしている。肩部以下は使用によると思われる磨耗が著しい。陶棺は、長さ30cm、幅20cm程度の身底部の破片で土師質である。1辺に切削面を、底面には脚台の接合部をとどめる。底面から側面にかけての立ち上がりが緩やかなので、亀甲形であると思われる。

6号墳は人家の間に墳丘の一部と横穴式石室が残されている。円墳であろう。6号墳に由来すると思われる須恵器が久保博氏によって発見されている。

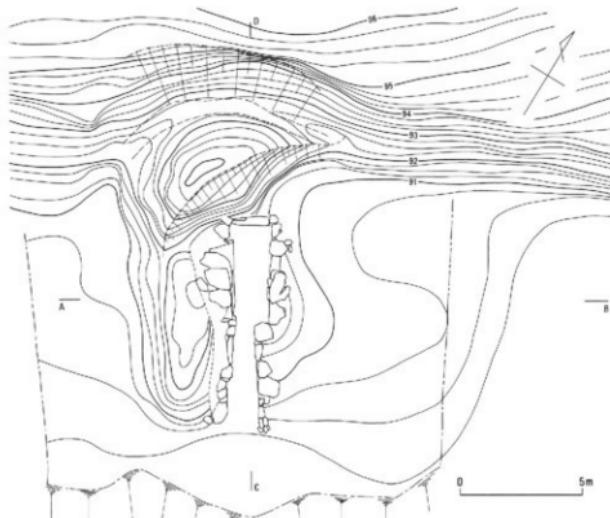
須恵器には甕と壺身がある。い

2 1号墳

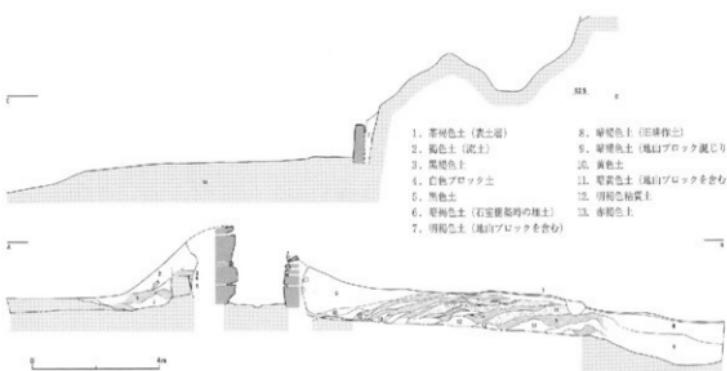
A 墳丘

1号墳の立地する場所は北西から南東へ緩やかに伸びる斜面であるが、背後は段差5m程度の急斜面となっている。その急斜面を一部カットして周溝として利用しているようである。

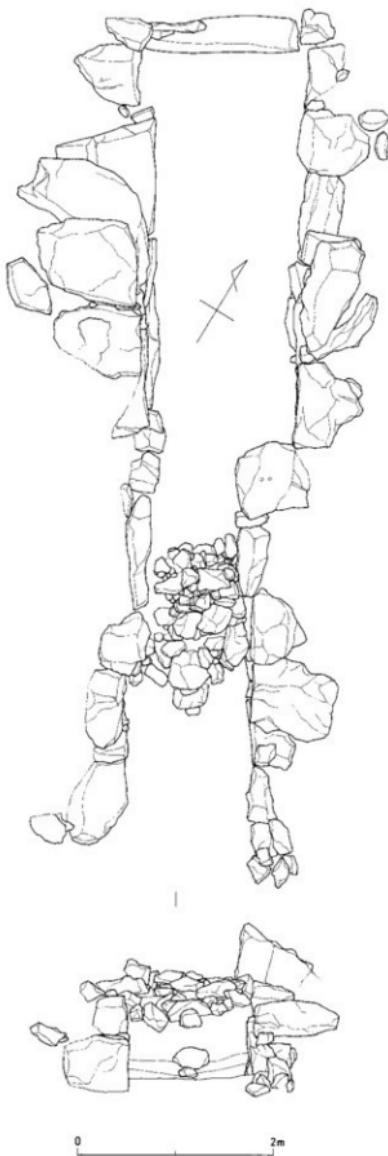
墳丘の遺存状況は極めて悪く、現状では東西7m南北12mの不整形で、最高所で3m程度の高さを持



第5図 1号墳平面図 (1:200)



第6図 1号墳埴丘断面図 (1:160)



第7図 1号墳石室平画図 (1 : 50)

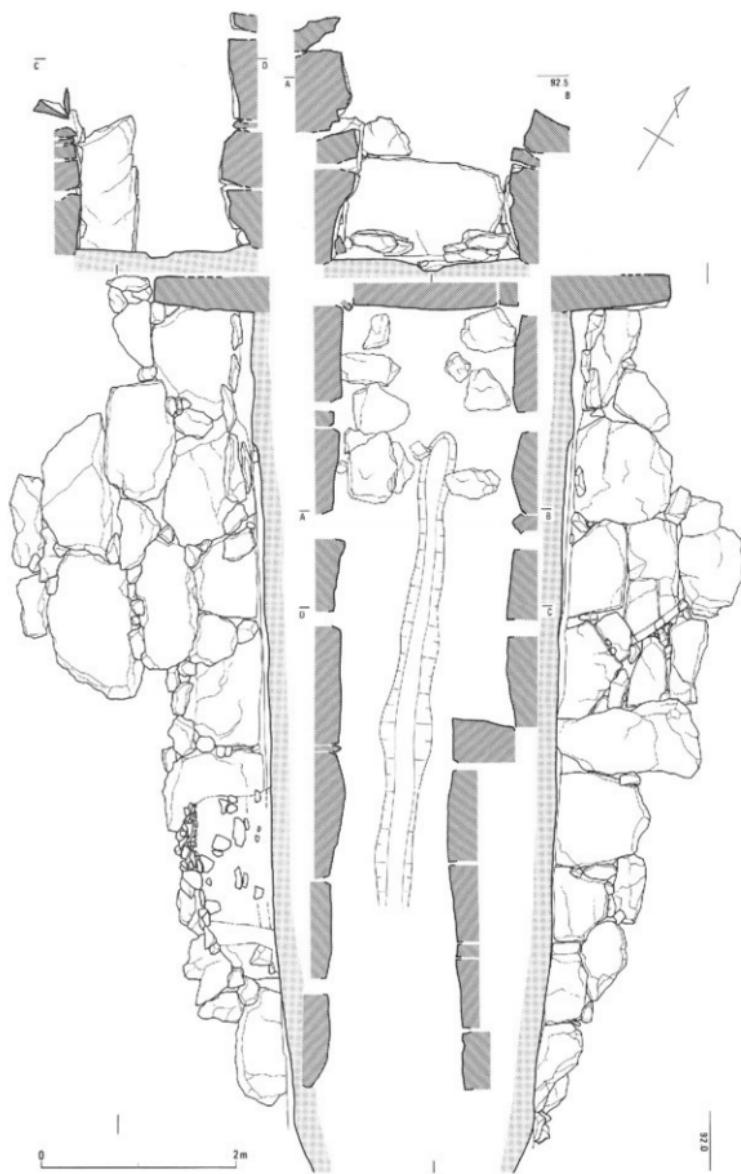
つ。そのうち本来の形状を保っていると見られるのは、石室北側から北東部のわずかな部分のみである。墳丘基底部の高さは山側の周溝底と石室南端で2.5mの差がある。

墳丘の構築方法については、石室主軸方向には断ち割りを行っていないので詳細は不明であるが、石室に直行するトレンチでの所見を示す。それによると石室の遺存状況の比較的よい西側では、地山を50cm程度掘り込んで石室を構築している状況が認められる。またその外側についても、地山を若干掘り込み、互層の盛土を行っている。東側については後述の互層の盛土を除き、石室構築時の盛土は1層で一気に埋めている。また、石室構築時の地山の掘り込みは若干認められるようであるが、本來の地山レベルが低いためであろうか明瞭ではない。

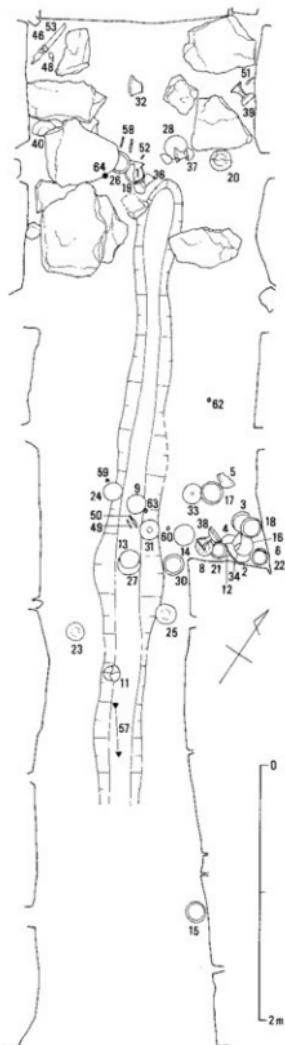
一号墳の墳丘で特筆すべき点は、墳丘北東部に互層の盛土による地形の整形が認められる点である。現状では墳丘はほとんど遺存していないが、よく見ると90m75cmの等高線が大きく石室から北東側に伸びていることに気付く。この部分にトレンチを設定したところ、石室から北東方向へ9mにわたって人為的な互層の盛土が認められた。この部分を墳丘として認めるならば直径が20mを超えることになるが、北側、西側、南側の状況から見るとそれは考えがたい。あるいはこの部分を「突出部」と推定することも不可能ではないが、周囲の状況からはその可能性は薄いだろう。

ここでは北東方向に人為的な盛土が存在し、あるいはそれが削平された造出しあるいは突出部である可能性もあるということに止めておく。

これらの状況から墳丘の当初の規模を推定してみると、径13m、高さ3m程度の円墳と考えられる。



第8图 1号填石室实测图(1:50)



第9図 1号墳遺物出土状況 (1:40)

石室の奥壁側に左右の側壁に沿うように椎台と思われる扁平な石が置かれている。右側壁側のものは一辺50cm程度の石を3つ並べその間にやや小さ目の石を配置している。長さは約2m幅70cm程度の規模となる。左側壁側のものは、右側よりもやや小さい石を3つ並べている。こちらは長さは同じく約2m、幅60cm程度である。

B 周溝(第3図)

周溝は石室背後の山側にのみ残っている。

現状で規模は長さ8m、最大幅4m程度であり、深さは山側から最大2.5m、墳丘側からは1m程度である。この周溝下底のラインは現況ではかなり整った円形を呈している。しかしながら試みにこの周溝下底ラインで墳丘を復元してみると直径が10m程度となり、石室の1/3が墳丘からはみ出してしまう。この点からもこの1号墳の墳丘は本来不整形であったことが推定される。

C 石室(第5・6図)

石室の遺存状況は悪く、天井石はすべて外されている。また、石室側壁については基本的に1段、最大でも4段、羨道も基本的に1段、多くても2段程度しか石材が遺存していない。奥壁も高さ1m程度の薄い板状の石が1石遺存しているのみである。

現状の羨道入り口部分から奥に向かって約1.5mから3.7mの部分には閉塞石が残っていた。現状で高さ1.1mである。この閉塞石については表面は拳大から人頭大の角礫で覆われているが、これらの石を除去するとその内部にはほとんど礫は存在せず、土を盛り上げた後に表面に石を貼ったような状態であった。

床面は奥壁よりも羨道入り口側が約40cm低くなっている。また、石室から羨道へ向かってほぼ中軸上に30~50cm、深さ10cm、長さ5mの素掘りの排水溝が存在している。

石室は現状で全長8.5m、石室長4m、石室最大幅1.7m、羨道長4.5m、羨道最大幅1.2mの左片袖式の横穴式石室である。石室の高さについては右側壁の石材から推定することができる。というのはこの部分は高さ50cmを超える石を3段に積んだ上に高さ20cm強の小さな石が高さを調節するように積まれているのである。つまりこの石の上に天井石が乗っていたと考えられるので、それから推定の高さは2.5m程度となる。また、羨道の高さは推定できる材料がないので、不明と言わざるを得ない。

D 遺物の出土状況（第7図）

1号墳の遺物は一部のものを除く大半が石室内の床面から出土した。奥壁から南約2mにかけての左右両側壁沿いには、扁平な石が3～4個並んだ状態でみられ、これらは先述のように棺台となる可能性が高い。遺物はこの石の周辺と袖部のコーナー付近の2箇所に集中しており、各地点において須恵器、鉄器を中心とした遺物が出土した。以下、奥壁側から順にみていく。

奥壁沿いの右側壁とのコーナー部では鉄刀（53）、及び鉄鏡（46・48）が出土した。その地点から右側壁沿いに約0.6m南には須恵器の壺（40）が出土した。また、左側壁沿いの2つの平石の間からは、須恵器の壺（39）及びリ子（51）が出土した。石室奥壁寄りの中央部には、土師器の壺（1）、須恵器の壺身（19・20・26・28）、聴（36・37）、壺（32）、鍛錘車の鉄芯と思われる鉄製品（58）などが出土した。さらに、石を除去し、精査した段階でガラス小玉（64）が出土したため、他の玉類の探査につとめたが、この1個体の発見にとどまった。

石の南端から玄室袖部の遺物集中地点まで約2mの間は遺物の空白地帯であり、遺物は全くみられなかった。中央よりやや左側壁寄りに鉄地金銅張の耳環1個（62）が出土したのみである。

最も遺物が集中して出土したのは袖部のコーナー付近から玄室と段階の境界部分にかけてである。遺物は須恵器壺身、壺、壺、鉄鏡（49・50）などがあり、銀製の耳環が一対（59・60）および鉄地金銅張の耳環が1個（63）出土した。63の耳環については先の62と対になるものと考えられる。これらの遺物は、1箇所にまとめられた状態で出土したことから、追葬のときにかつて副葬されていたものを片付けたものと推測される。

その他、石室の閉塞石埋土巾から須恵器の破片や鉄製馬具、不明鉄器などが出土し、閉塞石を除去した後に検出した床面からも須恵器の壺蓋（11）が出土した。また、この付近からも鉄地金銅張の耳環が1個（61）出土した。さらに、閉塞石の外側からも須恵器の壺身が1個（15）出土した。

以上の出土状況からは、棺が据えられていたと推定される奥壁に近い部分に遺体の埋葬が行われ、奥壁付近の遺物はこの遺体に伴っていたと考えられる。また、片づけられた遺物の中及び閉塞石付近から出土した耳環の個数からは、遺体は少なくとも3体あったことが推測される。

E 出土遺物

出土遺物には土器と金属製品、そしてガラス製品がある。以下、順に概要を述べる。

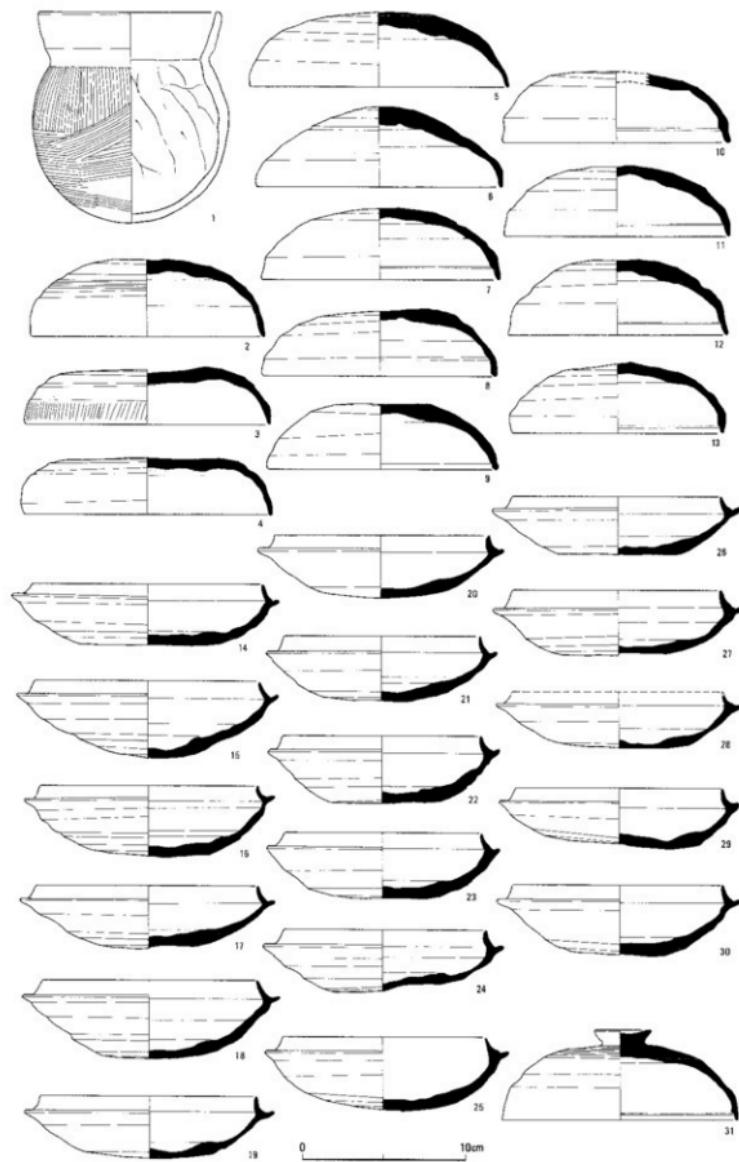
1. 上 器（第10-12図） 十師器と須恵器がある。土器の総出土個体数は45個体で、うち土師器は1個体にすぎない。ほかの44個体はすべて須恵器である。

土師器（1） 球形の胴部をもつ小形の壺である。頭部から立ち上がる口縁部の外面にはわずかな段をもち、二重口縁の痕跡をかすかにとどめる。胴部内面はヘラ削り、外面はハケメを施している。

須恵器（2-45） 須恵器には壺蓋、壺身、有蓋高壺蓋、広口壺、長頸壺、蓋壺、提瓶、無蓋高壺、聴などがある。

壺類は、いずれも蓋にはかえりをもたない、壺Hと分類される形態のもので、胎土や焼成の違いから3種類に分かれるようで、生産地の違いを示すものかもしれない。

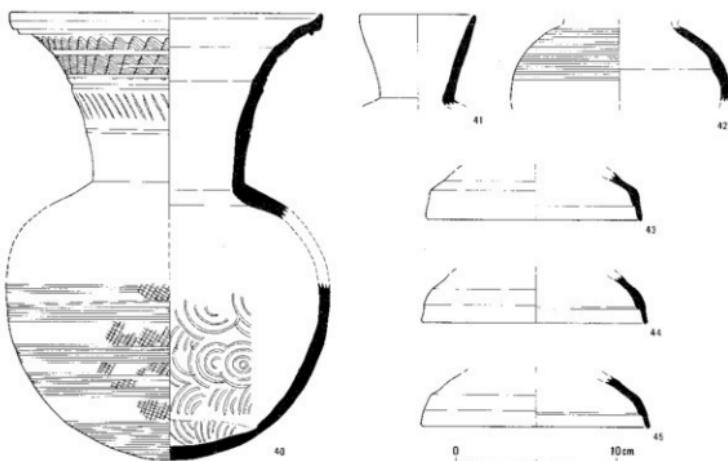
壺蓋（2-13、43-45）は法量、製作手法や形態から3種類に分類できる。2が1類で、口径14.3cm、高さ4.8cmである。口縁部の立ち上がりが他よりも大きい。天井部の周辺にはカキ目を加える。天井部はヘラ切り後に回転ヘラ削りを施しているが、中央部にはヘラが当たらず、b手法（1）に分類される。2類（3-6）は、口径が14.7cmから15.8cmまで、高さは3.5cmから4.9cmである。このうち、3・4は



第10图 1号填出土遗物 1 (1:3)



第11図 1号墳出土遺物2 (1:3)



第12図 1号墳出土遺物3 (1:3)

低く平らな天井部をもつもので、形態的には他と区別される。3の口縁外面には縱方向のヘラ描き文を加えている。2類の口縁端部は丸くおさめる。製作手法は、いずれも天井部を残さず回転ヘラ削りするa手法である。3類(7-13・43-45)は口径が13.2cmから14.3cm、器高が4.0cmから4.4cmのもので、口縁部内面に段の痕跡をもつものが多く認められる。口縁端部近くに残すもの(9・13)と、やや高い位置にもつもの(7・8・10-12・43-45)とがあり、ほとんどが後者である。9の内面中央には、同心円文の痕跡が残る。製作手法はヘラ切り後に周辺部だけを回転ヘラ削りするb手法が多く認められる。他はa手法である。

坏身(14-30)には、胎土や焼成などから、坏蓋との対応関係が推定できるものがいくつか存在する。身14と蓋4、身17と蓋2、身22と蓋12がセット関係をもつと思われる。このことを含めて分類すると、17が1類に相当する。口径13.1cm、器高は3.9cmで、a手法。2類(14・18)は、口径が14cm弱、器高は3.7cmと4.8cmである。いずれもa手法である。その他は3類に属し、口径は11.8cmから13.4cmまで12cm台に集中する。製作手法はa、b手法が半々である。これらは法量以外には、坏蓋ほど形態上の差異はみられない。

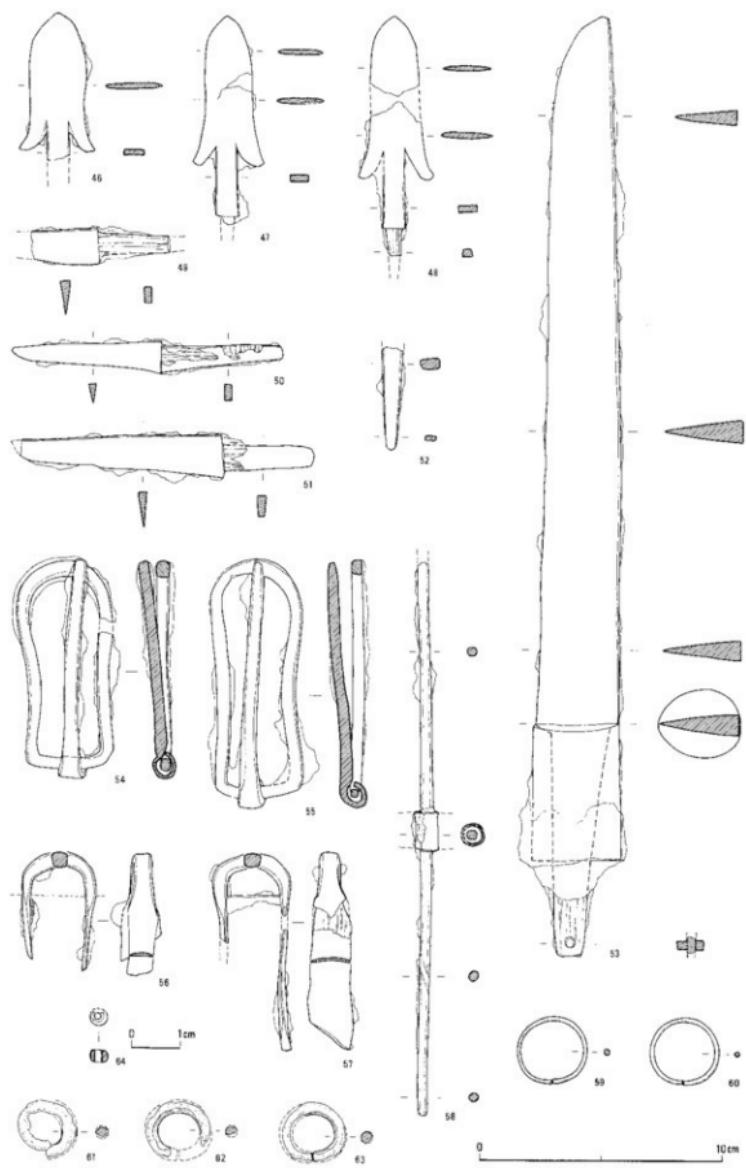
無蓋高坏蓋(31)は天井部にカキ目を施し、口縁部内面に明確な段をつくるものである。形態は坏蓋1類に類似する。

広口蓋(32・40)は2個体あり、いずれも頸部を凹線文によって3段に区切り、刻目文や波状文を加える。口縁部のつくりは異なる。

長頸蓋(34)は、胴部から口縁部まではしか残ないので、下半部の形状は不明である。よく張った肩部と胴部中央に凹線文を施し、間に刻目文を加える。精良な胎土で焼成はやや甘い。

蓋(33)は長頸蓋の蓋である。中央に棒状の高いつまみをつけ、周間に放射状の刻目文を斜めに巡らせている。口縁部には外傾する端面をもち、特異な形状である。胎土焼成とも34と同様である。

提瓶(35)は、口縁部をそのまま丸くおさめたもので、肩には棒状把手の痕跡を残す。胴部の片面に



第13圖 1号出土遺物4 (1 : 2)

刻目文がある。

無蓋高杯（38・39）は小さな杯部に長脚がつくもので、脚台には3方2段透しがある。同形だが、杯部や脚端のつくりは異なる。

匙（36・37）は、頸部の長短が認められる。

以上の他に、提瓶あるいは壺かと思われる破片（41・42）が出土している。

2. 金属製品 鉄刀1、鉄錐3、刀子4、紋具2、紡錘車芯棒1、不明鉄器2、耳環5がある。

鉄刀（53）刃渡り29cm、現長38.5cm、刃部幅3.4cmで、柄部には長さ5.5cmの鍔が付く。柄頭ちかくに目釘がある。

鉄錐（46-48）いずれも腸抉柳葉である。鍔身の大きさにはややばらつきがみられる。関には棘状突起はない。

刀子（49-52）同様の形状をもつ。完存する50は細身で、茎の糸巻き痕が残る。52も刀子の茎と思われるが、厚さの割りに幅が狭い。

紋具（54・55）同形同大のもので、鉄製。先端は丸みを帯び、中程をやや狭めている。馬具であると思われる。

紡錘車芯棒（58）長さ22.6cm、直径約4mmの鉄製棒状品で、一端を尖く。中央部に、幅1.6cmの鉄板を巻き付けている。この位置に紡錘車が装着され、鉄板は芯棒との固定するための留め具の性格をもつと思われるが、他にこのような例を知らない。木製紡錘車の存在をうかがわせるものである。

不明鉄器（56・57）中央部を半環状とし、両端を平たく叩き伸ばした鉄製品である。木材を挟み込むか、木材に打ち込まれていたもので、環状部分は而取りをして丸みを帯びる。いずれも羨道部の閉塞石下底付近から紋具とともに出土しており、馬具に関連するものかもしれない。

耳環（59-63）銀環と金環がある。59・60は同形同大の銀環で、ペアをなす。表面は黒く酸化するが断口は白銀色を呈する。61は鏽化して鉄芯だけが遺存する。62・63は緑青で覆われているが、部分的に金箔をとどめている。セット関係にあったと思われる。

3. ガラス製品 ガラス小玉（64）が1点ある。濃青色を呈し、半分近くを欠失する。

註

1 狹底器坏類の製作手法の分類は、下記文献によった。

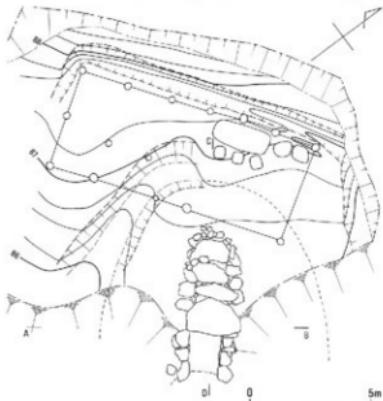
『大枝山古墳群』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第8号 財團法人京都市埋蔵文化財研究所 1989

3 2号墳

A 墳丘

本古墳群が位置する斜面は田畠に利用するため、段々に造成されている。2号墳の調査前の状況は、かつて畑地として造成使用されていたため、全くの平地の状態であった。石室部分は上位の畑面に、入り口部分は下位の田んぼ面上に位置する。このため、古墳の墳丘を想定させる条件は何もなかった。しかし、僅かに石室の天井石、及び入り口部分の側壁と思われる石材が露出していたことから、横穴式石室墳であることが判明した（図版3）。

従って、墳丘の規模については全く不明といわざるをえない。ただ、発掘調査で石室主軸の左上方部に周溝と思われる弧状の溝が検出されている（第14図）。この溝が本墳の周溝になるとすると、石室主軸に直交する墳丘の最大径は10m弱になると想定される。



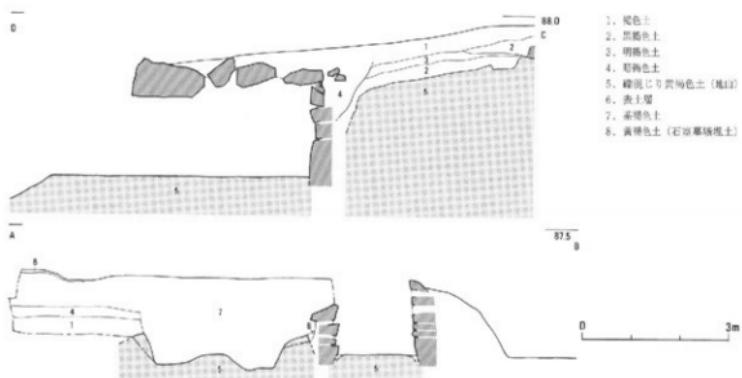
第14図 2号墳平面図（1:200）

次に、石室主軸ラインでの墳丘径であるが、前述の弧状の溝、及び石室の遺存状況から推定すると、約9m位に復元できようか。入り口部分の側壁の石がもう少し続いているとすれば、自ずとこの値は大きくなる。

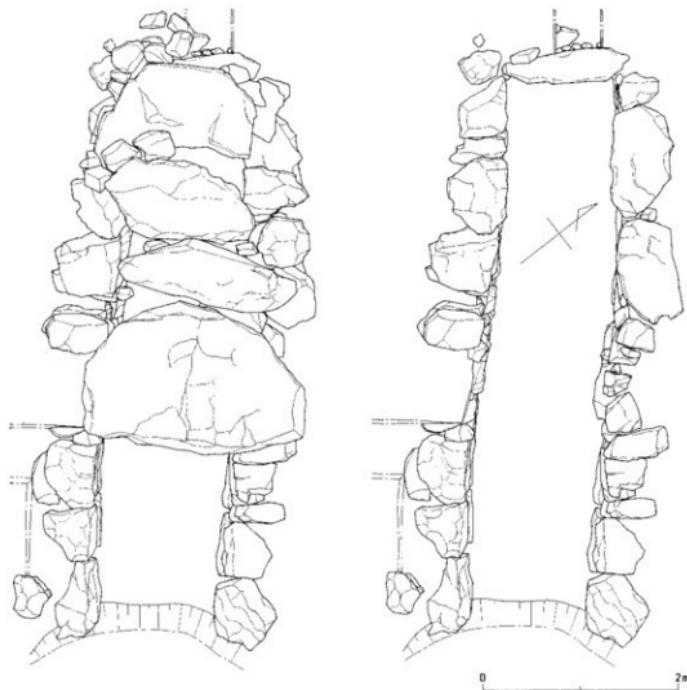
いずれにしても、直径10m前後の円墳であることには間違いないまい。高さについての手がかりはなく不明である。

B 周溝

周溝と思われる弧状の溝は石室主軸の左上方で検出されただけである（第14図）。このことは主軸上方から右方向にかけては周溝底面の



第15図 2号墳墳丘断面図（1:150）



第16回 2号墳石室実測図1 (1:50)

レベルがもう少し高かったことが考えられる。遺存している溝の長さは約7mにわたる。幅は山側から谷側に向かって若干広くなる。検査面での幅は山側で約2m、谷側で約2.5mである。底面での幅は山側で約1m、谷側で約1.5mである。底面での傾斜はかなりきつく、山側と谷側の比高差は約80cmである。

石室主軸ライン上で、石室掘り方と溝との距離は約2mである。

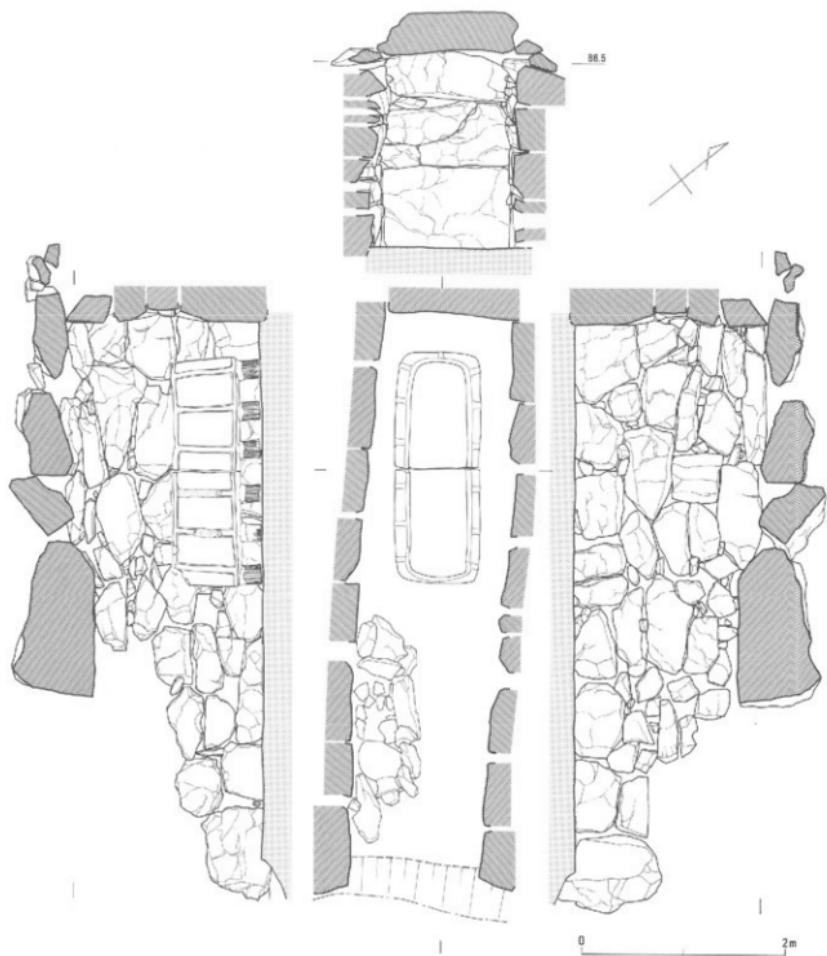
溝からの出土遺物はなかった。

C 石 室 (第16・17図)

床面での現存長5.6m、幅1.25~1.4m、高さ1.6~1.9mを測る無袖式の横穴式石室である。天井石は奥壁側から4枚が残っていた。4枚目の石が検査前に露出していたものである。5枚目以降が失われていると同時に、両側壁の石も上半部が失われている。

奥壁の石組みは大きく3段に分けることができる。下段に高さ80cm強の方形の一枚石を配置し、その上の中段に約60cmの高さで3個の石を組み合わせている。上段には高さ約40cm強の一枚石を使用している。

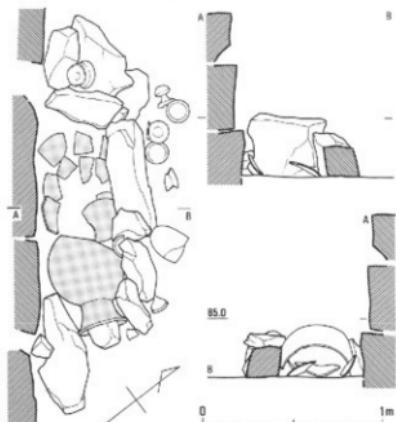
側壁はいずれも持ち送りではなく、ほぼ垂直に積まれている。使用されている石材は50~100cm位



第17図 2号墳石室実測図2 (1:50)

の大きさで、特に一定の基準はないようである。石積みは乱石積みのようであるが、よく観察すると4段に積まれているようにも見られる。入り口部分の小口両側壁の石は奥壁側の石と比べると、石を立てたように配置されている。これは入り口に近い状況を暗示しているのかもしれない。

時間的制約の中で、石室の石材を除去して掘り方を検出するまでにはいたっていないが、奥壁の裏のトレンチでは裏込め石が確認されている。



第18図 箱式石棺実測図（1：30）

D 箱式石棺

石室手前の南北壁面に沿って、1基の箱式石棺が設置されている。陶棺との位置関係から追葬と考えられる。北東側には4個の角礫を列べて側壁とし、南側は石室側壁をほぼそのまま利用するが、石室の入口側には1個の細長い角礫を添える。このため、石棺の主軸は石室とやや斜交する。幅50cm、高さ35cmの板石を立てて奥の小口とする。小口の外側にはさらにも3個の角礫を積み重ねている。

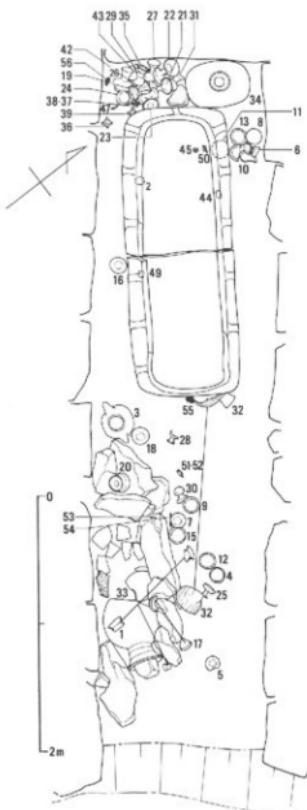
須恵器壺の胴部下半を割って、破片をまばらに棺内に敷いて土器床とする。土器床をなす破片はすべて器表を上面となっているので、遺骸の覆の可能性もある。土器床は、石棺の奥半分に限られ、石棺中央にはやや大きめの破片を両側に立てる。壺の上半部は、口縁部を手前に向けて両側壁の間に置かれる。口頭部には円窪を差し込んで棺の小口としている。頸部以下の胴上半部は、遺骸の一部を覆う形となっている。蓋石は検出されなかった。周囲にもそれらしい石材は見あたらなかったので、もともと存在しなかった可能性が高い。

石棺内法は、長さ1.05m、最大幅0.43m。棺内からは副葬品は出土せず、遺骸の頭位方向は不明である。

E 遺物の出土状況（第19図）

横穴式石室内の遺物は、石室奥（1群）と手前側の床面（2群）、陶棺内（3群）に大きく分かれて出土した。石室奥の1群は、陶棺と奥壁の間約40cm程の空間（A群）、奥壁に向かって右側、陶棺と側壁の間（B群）、陶棺の左側（C群）に細別される。

A群には須恵器、馬具、武器、鉄滓がある。右側に大形横瓶が、左側空間に甕、高坏、長頸壺が隙間なく出土した。甕や高坏など比較的器高のあるものは、多くが倒れた状態で出土したが、本来は正立して



第19図 2号墳遺物出土状況 (1:40)

た状態で副葬されたと思われた。横瓶と他の須恵器の間には板石が1個置かれていた。土器の支持用かもしれない。左側の土器群とともに雲珠、辻金具などの馬具一式が出土した。雲珠に銹着して鉄鏃の頭部と考えられる鉄器が1点ある。精査したが鏃身は発見されなかつた。あるいは錆化してしまったのかとも知れない。奥壁に向かって左端には鉄漆1個が置かれていた。木グループは須恵器坏類を含まないのが特徴で、先述した供獻形態の器種に限られる。

B群は須恵器の坏類のみからなる。うち1点は陶棺の脚間に位置する。一部の個体は破損して出土したが、本来は完形であったと考えられる。3個の坏身は正立して、2個の坏蓋は逆転して出土した。蓋を開けて供獻したような出土状況である。

C群は須恵器坏身1点と土師器壺(2)で、坏身は逆転して、壺は陶棺脚間に正立して出土した。

第2群は、陶棺前面から、手前の箱式石棺付近にかけてのもので、須恵器、土師器、鉄製武器、鉄漆がある。横瓶(32)や坏身(17)、土師器壺(1)のように破片となって離れて出土することが示すように、少なくともこれらのいくつかは後世の擾乱を受けたことが明らかである。原位置を留めていると判断されるのは、次のとおりである。

土師器瓶(3)は箱式石棺の奥に位置し、他占墳出土例の多くと同様、倒立して置かれている。鉄漆は陶棺前面中央の脚付近に位置する。須恵器坏類は箱式石棺の右側に配置される。その多くは原位置を保つと判断される。17・18以外の坏身は正立し、坏蓋は逆転するもの(4)と正立するもの(5・7)の両者がある。高坏(20)は完形で、箱式石棺奥の小口外石の上に逆転して置かれていた。須恵器の多くは箱式石棺の埋葬時に副葬された可能性がある。鉄漆(55)は陶棺手前の足下に置かれ、陶棺埋葬を意識したものであろう。

第3群は、陶棺内出土の遺物で、耳環1、鞘尻金具1、刀装具片1、不明鉄器1からなる。耳環と不明鉄器及び鞘尻金具は奥の北東側から、刀装具は中央の南西側から出土した。すべて陶棺底面からの出土であるが、棺内の少なくとも一部は擾乱を受けていて、これらが副葬品のすべてでないことはいうまでもない。

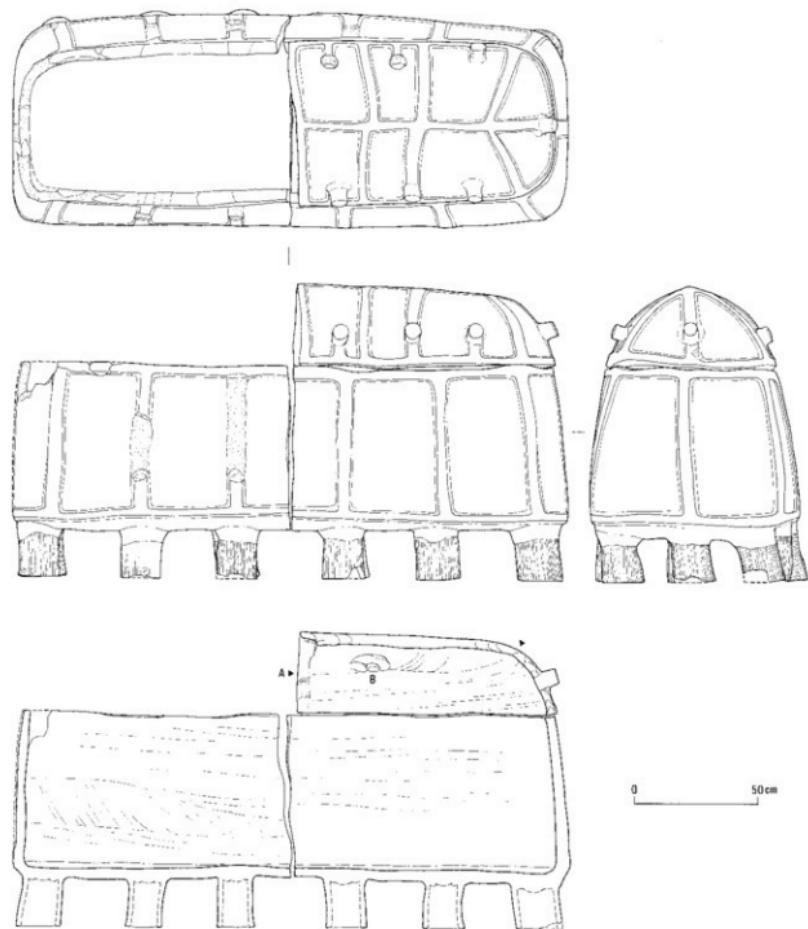
F 陶 棺 (第20図)

土師式亀甲形陶棺が1基ある。石室中央奥の、地山を平坦に削り込んだ床面にそのまま置かれていた。焼成前に4分割され、手前側の蓋部の大半を失っているほかは、保存状態は比較的良好である。全長2.25m、高さ1.19m、最大幅0.87mで、棺底下面から身部上端までの高さは0.86m、脚部高0.2m、蓋部の高さは0.33mである。明赤褐色で、良好に焼成されている。黒斑や赤色顔料および化粧土の塗布は認められない。

身部と蓋部の内外面はナデ仕上げで、タタキなどの痕跡は認められない。

蓋部には14個の突起が付く。現存するのは内5個で、断面は円形、直径・長さともに6cmをはかる。身部下端と、蓋部との合わせ目に横位の突帯2列がある。蓋部天井の主軸に沿う突帯と、これら2列の突帯の間には、縦位の突帯がそれぞれ配置される。縦位突帯の位置は、蓋部と身部では必ずしも一致しない。縦位突帯は横位突帯の後に付けられている。遺存する片側の蓋部では、縦位突帯から離れて位置する5個の突起の下部には短い突帯が付けられ、これが本陶棺の外見上の特徴となっている。封じ穴(B)は本来直径15cmほどで、2段階に分けて封じている。蓋同士の接合部の天井近くには、受け部と重ね部を作り、広葉樹の葉を間に置いて接着を防止した痕跡がある。

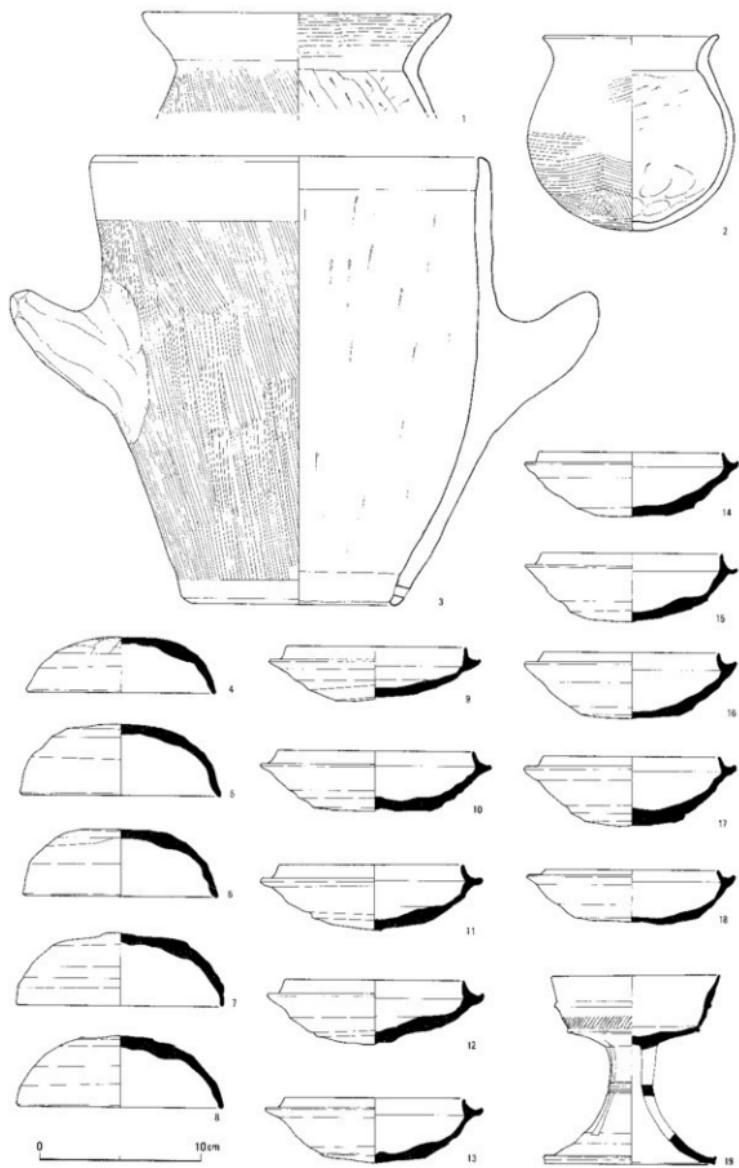
脚部は直径18cm程度の円筒形で、縦3列、横6列。全体で18本あり、いずれも厚さ約2cm。外面は



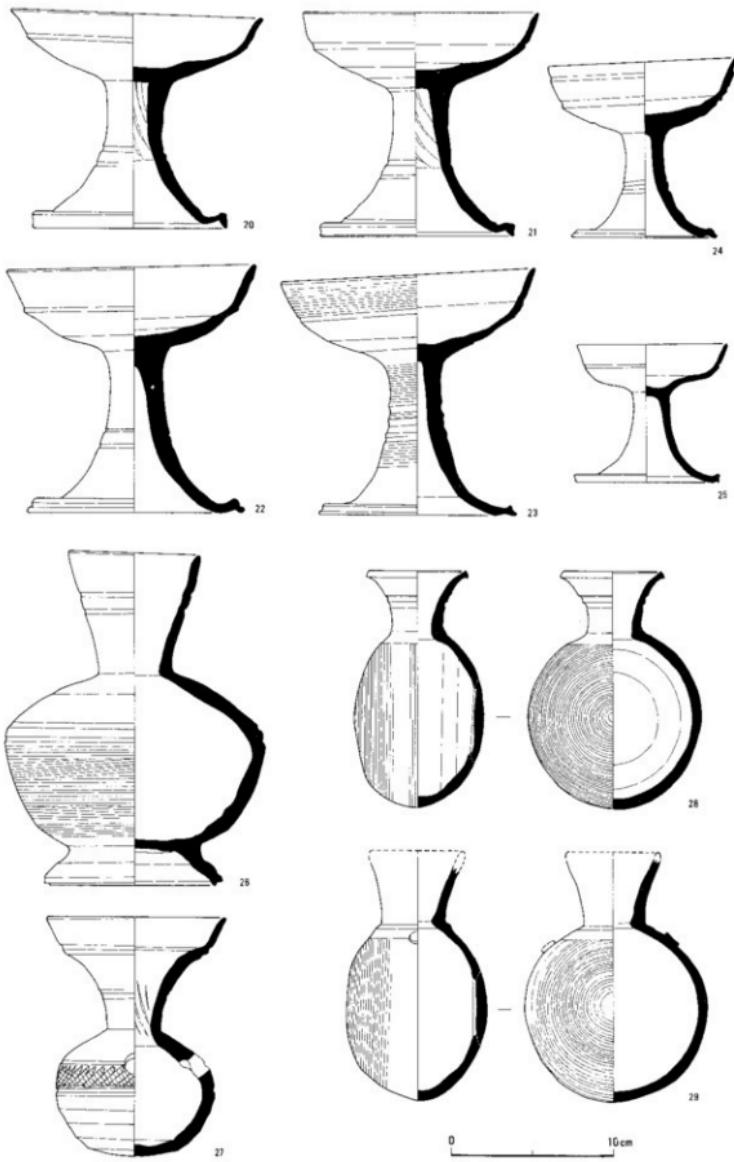
第20図 陶棺実測図 (1:20)

タテハケを施し、内面は縱方向にナデ仕上げする。粘土繩を積み上げて成形するが、粘土繩の接合面は、通常の円筒埴輪などと逆で、外傾する。脚と身部の接合については、破損により観察可能な1、2の例では、脚部上面に円錐状の粘土を置いて内径を狭めたのちに、円盤状の粘土塊で封じたようである。

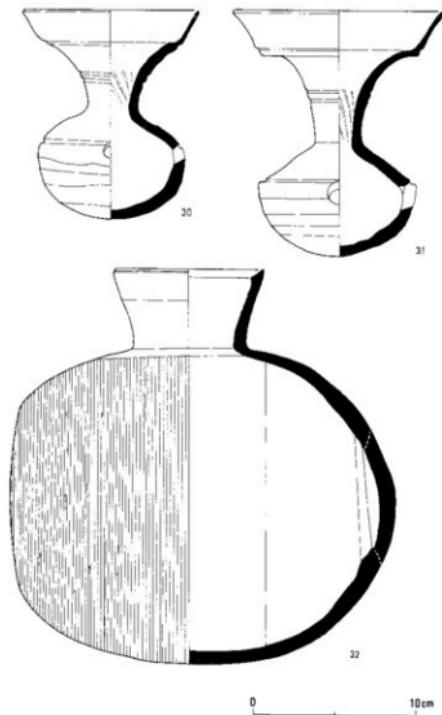
以上の特徴および観察によって復元される製作工程は、村上幸雄・橋本惣司両氏の案¹¹²と基本的に共通する。



第21図 2号墳出土器物 1 (1 : 3)



第22図 2号墳出土遺物2 (1:3)



第23図 2号墳出土遺物3 (1:3)

底部に一对の孔を穿つ。

須恵器 胎土や焼成などから产地が異なる可能性のある、少なくとも3種が存在する。

坏蓋（4・8）は、口径が11.7cmから12.7cm、器高は3.4cmから4.5cmで、法量は比較的共通する。製作手法はa手法が1点、b手法が2点、c手法が2点とさまざまである。このうち4は最も小さく、製作手法は分類上a類に属するものの、不定方向のヘラ削りが目立ち、通常のa手法とは趣を異にする。器面に黒色斑粒が多く認められることを含め、他と区別されるものである。しかし、これに対応する坏身は存在しない。4を5類、それ以外のものを4類とする。

坏身（9・18）は口径が10.6cmから11.8cmで、11cm近くに集中する。器高は3.4cmから4.3cmで、4cm近辺に集中する。製作手法は9だけがb手法で、他はすべてc手法である。すべて4類に属する。

無蓋高坏にはA・B・Cの3形態がある。A（19）は、小形の坏部に3方2段透しの入ったやや短めの脚台をもつものである。坏部下方に刻み目文を施す。B（20-24）は、段をもって外に聞く大形の坏部に長い脚台部をもつもので、脚台中央に2条の凹線文を施し2段に区画するが、いずれも透しはない。C（25）は、B類を小形化した形態の低脚のものである。ただし脚台には凹線文はない。

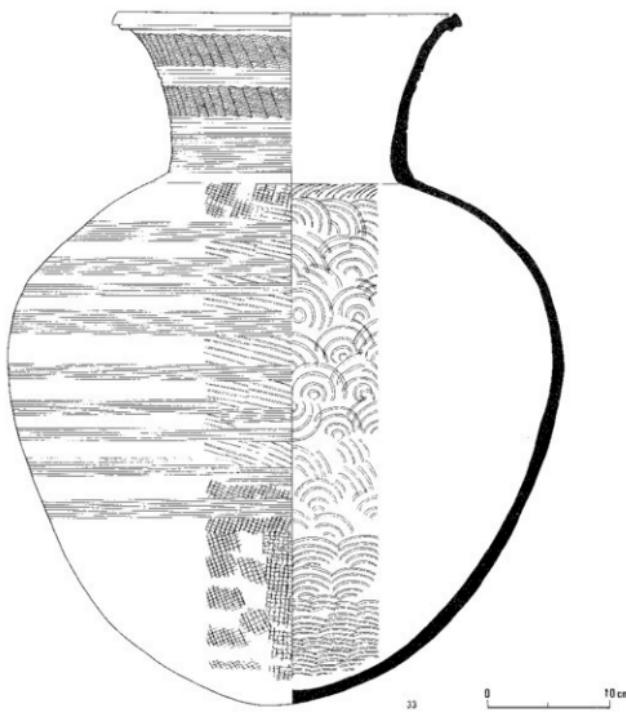
台付長颈壺（26）は、外に張り出した短い脚台の付くもので、口径7.7cm、器高20.6cm。頸部と肩部

G 出土遺物

遺物には土器、金属製品、鉄滓がある。以下、種類ごとに説明する。

1. 土器（第21-25図） 土師器と須恵器の合計34個体が出土した。うち須恵器1点は埋葬施設の一部として利用されたもので、あとは副葬品である。土師器は、壺2と瓶1の3個体で、須恵器は、坏蓋5、坏身10、無蓋高坏7、台付長颈壺1、提瓶2、甌3、横瓶2、壺1の合計31個体がある。

土師器 壺は、いずれも外反する口縁部をもつもので、端部を丸く收める。1は口縁部を主体とした破片で、全形は不明である。煮炊きにともなう煤が付着する。2は口径10.4cm、器高12.0cmの小形品だが、胴部には煮沸使用による赤変が認められる。口縁部の一部を欠く。瓶（3）は口径24.0cm、高さ27.5cmで、上方が聞く円筒の胴部両側に把手を付けたもので、口縁部と底部にヨコナデ調整を加える。内面はヘラ削り成形し、



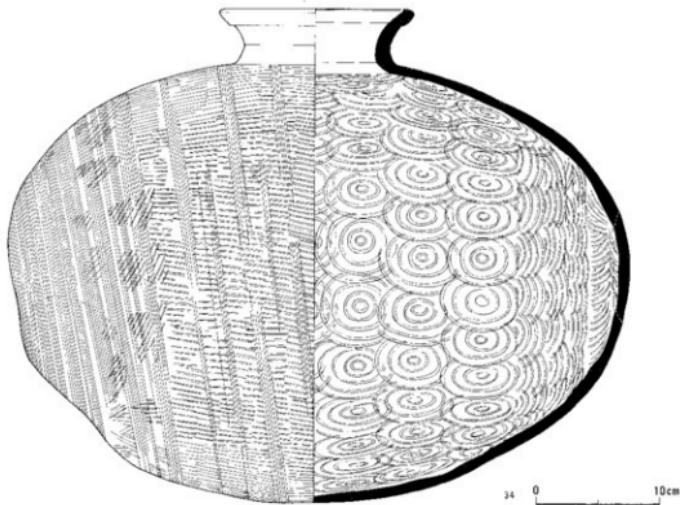
第24図 2号墳出土遺物4 (1:4)

に2条の凹線文を、肩部下半にはカキ目を施す。石室北西隅で他の一括遺物とともに出土した。

提瓶(28・29)の内、28は外方に聞く口縁部に端面を作るもので、頭部に幅広い2条の凹線文を施す。肩部の片側を欠失するが、もともと耳は付けられていなかったようである。29は直口のもので、肩にはボタン状の耳を付ける。図示した裏面の胴部中央に×印のヘラ記号をとどめるが、全体に使用による磨減が著しく、薄れている。

瓶(27・30・31)は、肩部の張りの度合いや装飾の有無、焼成など個体による差異が認められるが、基本的には口縁部が広く発達した形態をもつ。

横瓶(32・34)は、器高24.3cm、胸部長23.7cmの小形のものと、器高40cm、肩部長50.4cmの大形品がある。前者(32)はやや開きながら直立する口縁をもち、端部は内傾した面をなす。後者(34)は胸檻の奥に据え付けられていたもので、外に聞く口縁部を肥厚させ、卵形の胴部形態をもつほか、成形手法や焼成等も32と異なる。片側の胴部外面には、焼成時に付いた坏類口縁の痕跡がある。その直径は12.5と13cmなので、4類の坏蓋に相当するとと思われる。この横瓶の内部に堆積した土を取り除く際に、砂鉄が存在することに気づいた。七をすべて水洗して砂鉄を回収したが、量は多くない。砂鉄あるいは砂鉄の多く含む土を意識的に入れてあったのか、それとも自然に流入した上に比較的多くの砂鉄が含まれる。



第25図 2号墳出土遺物5 (1:4)

れていたのか、判断することが困難である。

甕(33)は、口径27.6cm、器高57.1cm。棒状具による沈線で頸部を3段に区画し波状文とカキ目で加飾する。肩が張った胴部は、中央部と上下でタタキ目の工具を替えている。箱式石棺の一部として利用されたものだが、破片の接合により、ほとんど完全に復元されたので、箱式石棺の埋葬時に変形品であったものを破壊して使用したこと、そして棺内については攪乱が及ばなかったことを示すものと思われる。

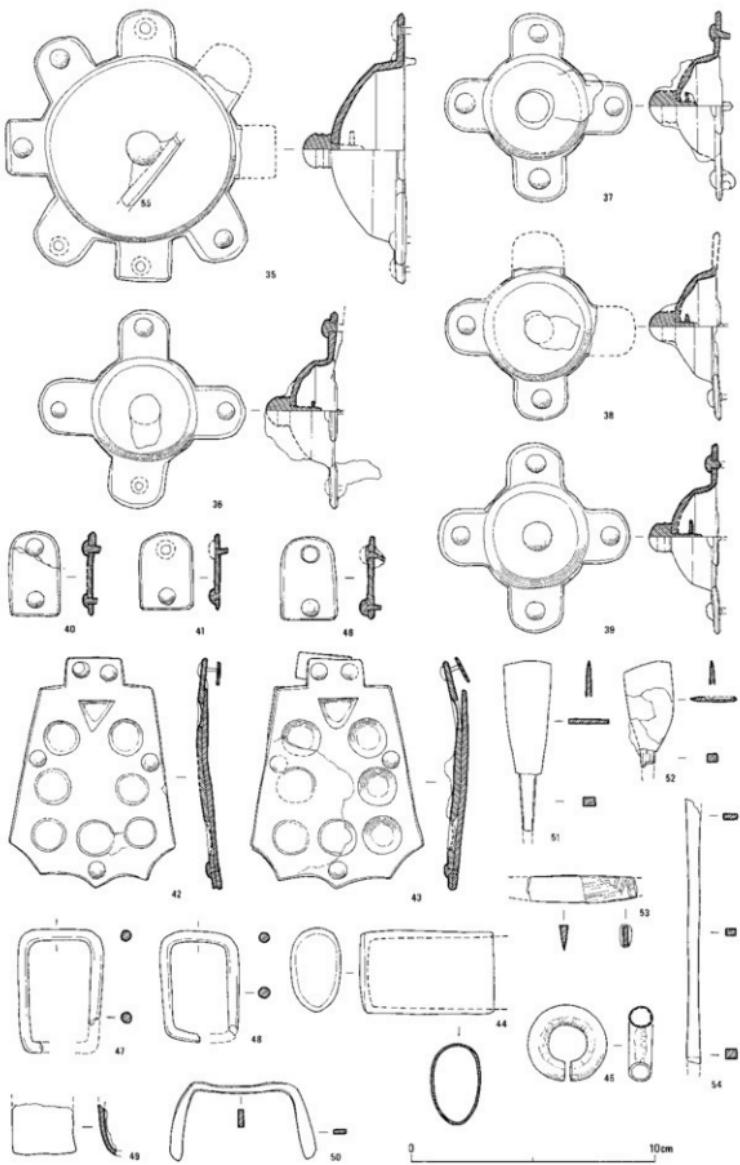
2. 金属製品(第26図) 馬具、鉄鏡、刀装具、刀子、不明鉢器、耳環がある。馬具は陶棺奥から、刀装具と耳環、そして不明鉢器は陶棺内から出土した。鉄鏡はおもに陶棺の手前から出土している。

馬具(35-43・46-48) 雲珠1、杏葉2、辻金具4、革金具3、絞金具2がある。

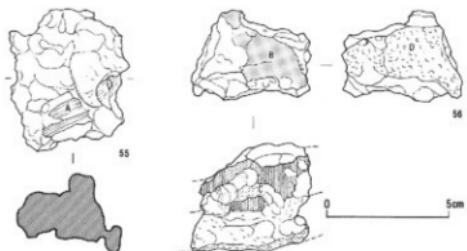
雲珠(35)は鉄地金銅張製で、中央に直径7.7cm、高さ2.7cmの半球状の鉢がつく形態をなし、鉢部には後をもつ。鉢の上には側面に2条の円線文を施した宝珠がつく。8脚で、両側と下方に方形脚がある。他の5脚は半円形を呈する。脚には各1本の鉢があり、革帶に装着する。鉢の内面には宝珠の脚が突出するが、欠失する。

杏葉(42・43)は鉄地金銅張で、棘葉形杏葉とよばれるもので、下辺に5棘をつくりだす。棘の突出は小さい。2枚の鉄地を3本の鉢で止めたもので、角張った肩をなし、7個の円文と上部に三角文を配する。上端には幅広の取付部があり、2鉢で止める。高さ9.4cm、幅約7cm。

辻金具(36-39)は4点とも同形のもので、径4.5cm、高さ1.5cmの鉢がつく。雲珠と同様に、鉢には後をもつ。鉢の中央には宝珠がつき、円線文を施すようである。4本の半円形脚をもち、各1本の鉢で革帶を止める。鉢部の内面中央には宝珠の脚が突出し、これに薄い方形鉄版を挿す。36では裏面の鉢付近に革帶の痕跡が観察される。



第26図 2号墳出土遺物 6 (1 : 2)



第27図 2号墳出土鉄滓 (1:2)

革金具 (40・41・46) は鉄地
金銅張で、長さ約3.5cm、幅
2.2cm。大きさにはややばらつき
がみられる。一端が半円形、他
が方形をなし、2本の鋸をもつ。

47・48は、直径5mm程の鉄製
棒状品を方形に成形したもの
である。47の長さは5cm、幅3.5cm
である。針棒部が発見されてい

ないが、絞具の一部と思われる。あるいは革帶の連続金具かもしれない。

鉄 錐 (51・52・54・55) 51・52の鉄身はいずれも頭式である。52は左右不对称であるが、先端が
鋭利につくられているので、ここでは鉄錐に分類する。54・55は錐身部を欠くが、長頭式鉄錐の頭部と
思われる。55は雲珠に錯付いて出土した。

刀装具 (44・49) 44は鞘尻金具で、長さ5.6cm、幅3.5cm、厚さ2.1cm。鉄製で内部には木質が付着す
る。49は厚さ2mm、幅2.6cmの破片で、鉗(はばき)と思われる。材質は不詳だが鉄製の可能性がある。

刀子 (53) 小形品で、刃と束の両端を欠く。東部には木質とともに樹皮状物で巻いた痕跡がみられ
る。

不明鉄器 (50) 幅7mm、厚さ2.5mmの鉄材の両側を折り曲げて、木材に打ち込みやすく先端を鋭利
にしたもの。小形の鎌状製品である。

耳環 (45) 銀環で、外形は高さ3.1cm、直径0.9cmの太形品であるが、中空で、銀板を円形の筒状に
成形したもので、両端には筒の直径よりも小さい円盤を当て、筒端を外から折り込んで固定している。
内側は放射状に研磨した痕跡が認められる。保存状態は良好だが、一部に金色を呈する箇所があり、金
が混入している可能性がある。

3. 鉄 淬 (第27図) 55は、長さ5.8cm、幅4.8cm、厚さ2.7cm、重量100gで、調査時に一部を欠損
する。気孔および木炭痕(A)が観察される。一部に長石粒を噛む。製鍊滓と思われる。56は、長さ
4.9cm、幅3.7cm、厚さ4.2cm、重量68gで、底面には砾を含む粘土が付着する(D)。炉内残留滓を小
片に破碎したもので、破面には半溶融状態の砂鉄(C)が観察される。砂鉄製鍊滓と思われる。両者と
も自然科学的分析は未実施である。

註

1 村上幸雄・橋本惣司「亀甲形陶棺の製作工程について」『考古学研究』第26卷 第2号 考古学研究会 1979

4 3号墳

A 墳丘 (第28・29図)

3号墳は、2号墳の南西に隣接する。それぞれの周溝外側の立ち上がり間の距離は約2mにすぎない。古墳築造時期は、2号墳に先行する。調査前の地形は平坦で、放棄されていたものの、かつては畠地として利用されていたと思われる。排土工事によって石室が発見されるまで、この位置に古墳が存在することは考えられなかった。

墳丘は円形で、中央の石室から南東側が失われている。これは過去の畠地造成に伴うもので、数mの落差の崖面をなしている。北東から南西にかけての石室主軸に沿った直径は10mで、石室中心から北西の墳裾までの距離が5.0mなので、直径10mの円墳と判断される。現存する墳丘頂部の石室床面からの高さは1.8mであるが、本来は2.5m程度はあったと思われる。

墳丘の遺存部分は、おもに地山削り出しとなっていて、盛土は石室を中心に部分的に残されていた。石室墓壇北西側の盛土下底部は、黄褐色土の地山となっていて、墳丘築成前に地山を削平したことがうかがえる。北東側には旧表土を残す。葺石や埴輪などの外表施設は存在しない。

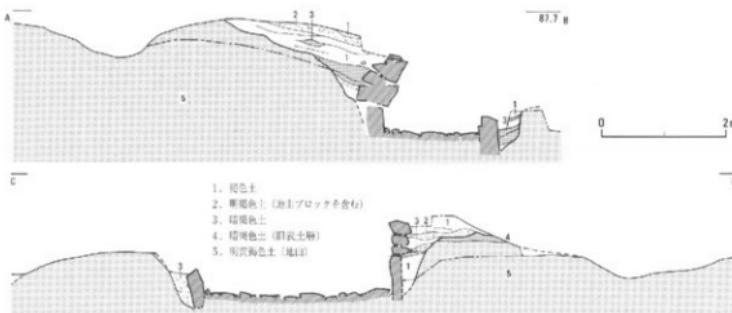
B 周溝

墳丘北西の山側に幅2~3mの周溝が存在する。溝底の幅は0.6mから1m程度で、外に緩く立ち上がる。周溝は墳丘の北東側で自然に消滅し、南西側では過去の造成により破壊されている。本古墳は北西から南東に下る斜面上に造られているため、墳丘の全周を巡ることはなかつたと考えられる。

周溝内からは遺物等は発見されなかった。

C 石室

墳丘中央に1基の竪穴式石室が存在する。他には埋葬施設はない。外表施設は存在しない。



第28図 3号墳平面図 (1:200)

工事に伴い発見されたため、南東側の側壁と南西側小口壁面の大半は、すでに失われていた。工事の際の攪乱は一部石室内にもおよび、遺構検出の段階では若干数の石材が石室内に崩落していた。これらのなかには確実に蓋石といえるものは存在しなかった。木蓋を用いた可能性もある。

墳丘中央に、長さ2.3m、幅1.5m、深さ約1.6mの長方形墓壙を掘って、石室を構築する。墓壙の中程から上部の壁面傾斜はやや緩く、2段掘りとなっている。現存する石室上端は、墓壙の上端よりも高く位置する。墳丘断面図に示すように、墓壙内の埋土層と盛土層の関係も整合するので、墓壙内に石室下底の石材を配列した後、石室の構築と墳丘の築造が同時に進行されたとみられる。

石室の長軸は真北から49度東偏する。石室床面の平面形は、崩張りの長方形をなし、最大幅はほぼ中央に位置する。内部の寸法は、長さ1.5m、最大幅0.8m、高さ約0.7m、北東小口部幅0.6m、南西小口部幅0.65mである。

角礫凝灰岩の角砾を石材に使用する。両側壁の最下段には厚さ約15cmの板石を各4枚用いる。小口にはこれよりもやや薄手の板石を同様に立て、隙間に小形の石材を用いる。南西小口の石材はやや低いが、これは両脇の側壁と高さを揃えた結果であると思われる。小口に向かい右側の幅17.5cmの石材は、上端を工事中に破損したものである。これらのことから、本石室が、小口側に羨道部をもつ、いわゆる堅穴系横口式石室であった可能性は完全には否定できないものの、墓壙の立ち上がりが両小口側とも一致することからも、その可能性は低いと考えられる。

立石の上に細長い石材を横にしてさらに2段積み上げている。北西側壁ではこれら上部の石材はかなり内傾して持ち送り状を呈する。当初は、後世の移動かとも思われたが、墓壙の立ち割り調査の結果、これらの2段の石材の間には外から横状に石が積まれ、構築当初から意図されたものであることが判明した。この持ち送りが反対側の側壁でも実施されていたならば、石室の上面観は比較的狭い長方形をなしていたと想定される。

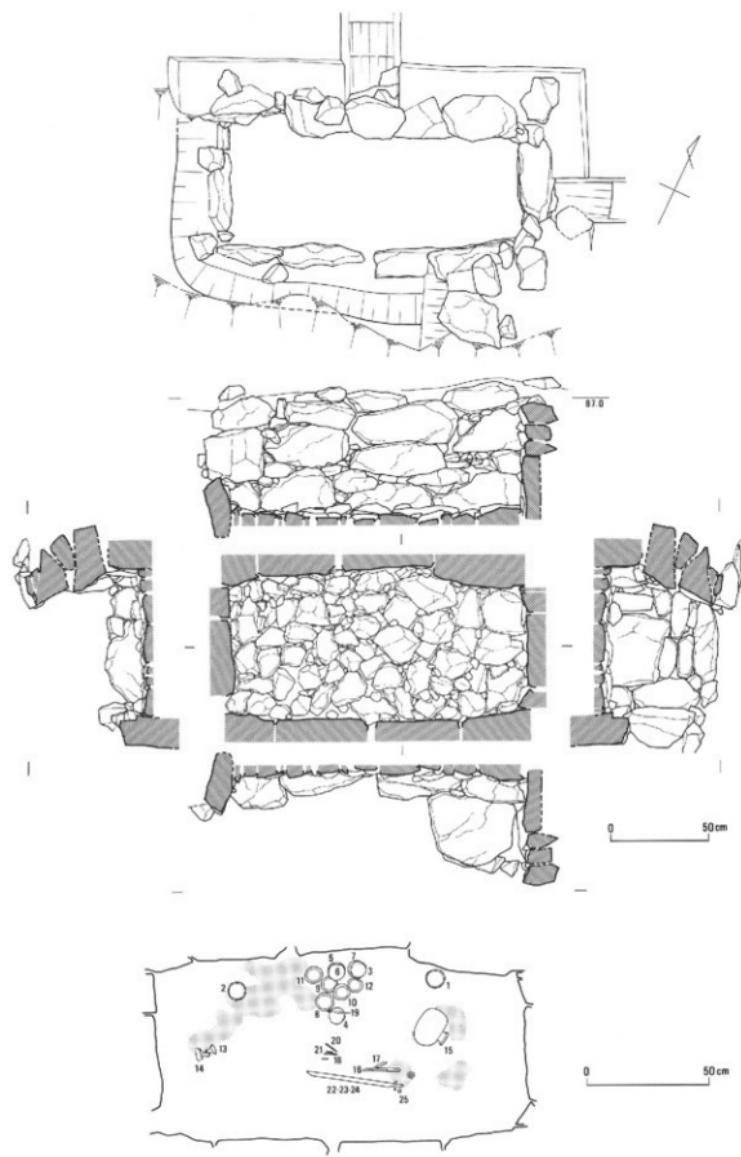
D 遺物の出土状況（第30図）

遺物は、石室床面のほぼ全体から出土している。これらは大きく分けると石室長軸から北側の須恵器と、中央から南にかけての金属製品に分けられる。

須恵器は、石室の東中央に横瓶（15）が置かれ、反対側に高杯2個体（13・14）が出土した。高杯は杯類は、基本的に石室中央の北側壁に沿って一括して出土したが、杯蓋1・2はやや離れて位置する。杯類の出土状況で特徴的なのは、いずれも杯身は正立して、杯蓋は逆転して置かれていることである。このうち、杯蓋5・6と杯身7・8・杯蓋3はそれぞれ重なり合う。杯身と蓋が同等に取り扱われている状況が見受けられる。こうした杯類の出土状況の説明としては、食物供獻の反映であるとする立場をとれば、杯蓋もまた容器として利用されたことを示していると考えられる。

金属製品としては、鉄刀（22・16）、刀子（17）、鉄鎌（18-21）からなる武器・工具類と耳環（25）がある。大刀（22）は、石室中央のやや南寄りの位置に切先を西に向けて置かれる。刀身には鏽（23）や貴金属（24）などが付属する。大刀の北側には小刀（16）と刀子が平行して置かれている。鉄鎌は石室中央部にはばまとまって出土したが、1点（19）のみやや離れて、杯蓋（4）の下から出土した。耳環は1点だけの出土で、大刀の東側付近から出土している。

遺骸の痕跡あるいは木棺の使用を示す形跡はいずれも確認されなかった。石室の蝶床表面には赤色顔料の付着が認められた。これらのほとんどすべては暗赤色で、ベンガラと思われる。石室中心部の周囲に薄く遺存する（第30図網版）。その他に大刀の柄部近くのごく小範囲に朱と思われる鮮やかな顔料が



第30図 3号墳石室実測図 (1:25, 1:20)

検出された。鉢の上端には、幾層もの比較的荒い布が付着している。この布面は大刀の北側に向いて湾曲しており、衣類あるいは遺骸を覆った布の一部である可能性がある。これらのことから、遺骸は石室中心部に位置し、頭位は東であったと思われる。

E 出土遺物（第35・36図）

遺物には土器と金属製品がある。

1. 土 器（第35図） 土器はすべて須恵器で、15個体ある。内訳は壺蓋6、壺身6、無蓋高壺2、横瓶1である。

壺蓋（1-6）は、汎量、製作手法などから2種類に分類できる。1類（1）は、口径14.8cm、器高4.3cmで平坦な天井部をもつ。肩には段の痕跡がみられる。口縁端部には明瞭な段がつく。天井部外面は丁寧に回転ヘラ削りするが、中心部にヘラがおよばない箇所があり、分類上はb手法である。

3類（2-6）は、口径が13.0cmから14.0cmまで、13.5cm内外のものである。器高は約4cm程度だが、6は5.1cmある。いずれも口縁内面のやや上部に段の痕跡をもつ特徴がある。製作手法は、5がb手法で、あとはすべてa手法である。4の天井部にはC形のヘラ記号がある。

壺身（7-12）も蓋と同じく1類と3類の2者に分類できる。7は焼成や胎土などから1とペアになるもので、1類に属する。他の3類とくらべ口縁部の立ち上がりが大きく、端部をやや肥厚させる。底部内面にはタタキの當て具による同心円文を残す。口径13.1cm、器高4.5cmで、a手法。

3類は、口径が11.9cmから12.8cmまで、器高は3.7cmから4.2cmまでのもので、すべてa手法である。そのうち12は壺蓋4と同様のヘラ記号があり、セット関係をなす。

無蓋高壺（13・14）はいずれも比較的短脚で、ほぼ同じ大きさのものだが、壺部の形状や脚端部の收め方が大きく相違する。13は丸みを帯びた壺部から外に湾曲して開いた口縁部をもち、壺部外面には1帯の刻み目文を施している。脚台には長方形の3方透しをもち、脚端は肥厚させ、内傾する端面に2条の凹線文を加える。14は、壺部と、直線的に聞く口縁部との間に突帯を運らせたもので、脚台に三角形の3方透しがある。脚端には、外傾する平坦面をつくる。両者とも自然粋のかかる堅緻な焼成である。

横瓶（15）は口径11.6cm、器高25.5cm、胴部長31.8cm、同径22.0cmで、短い頭部から聞く口縁外面を肥厚させ、端部を内側にナデつけている。

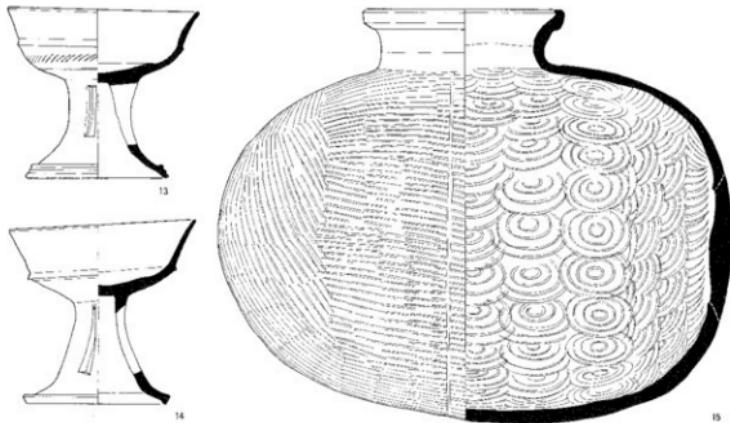
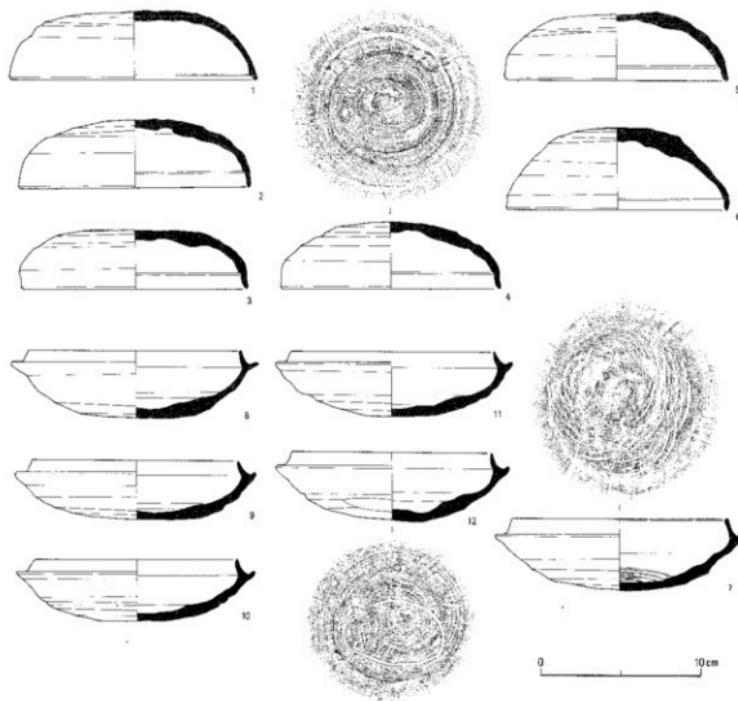
2. 金属製品（第36図） 大刀1、小刀1、刀子1、鉄鎌4、耳環1が出土した。

大刀（22） 現長76.6cmだが、先端を欠失している。刃部は幅3.6cm、厚さ0.8cmで、鞘の木質が付着する。東部には鉢（はばき）と鈎（23）が装着された状態で出土した。鉢の東側には資金具（24）が付属し、柄の一部が遺存していた。柄は、木質の上に幅5mmの獸皮状の紐を巻き付けたもので、一部には目釘が残る。紐と目釘の材質は不明である。刀身の柄頭側は刃部側に傾斜した形状を示すが、遺存状態が悪く明確な端面を示さないことや、柄部が短すぎることからみて、欠損している可能性がある。鉢は水滴形で、長方形の透しを6箇所に配置する。高さ7cm、幅6cm、厚さ1cmで、外周が厚く面をもって作られている。鉄製で、象嵌などは認められない。上端に布が厚く付着する。

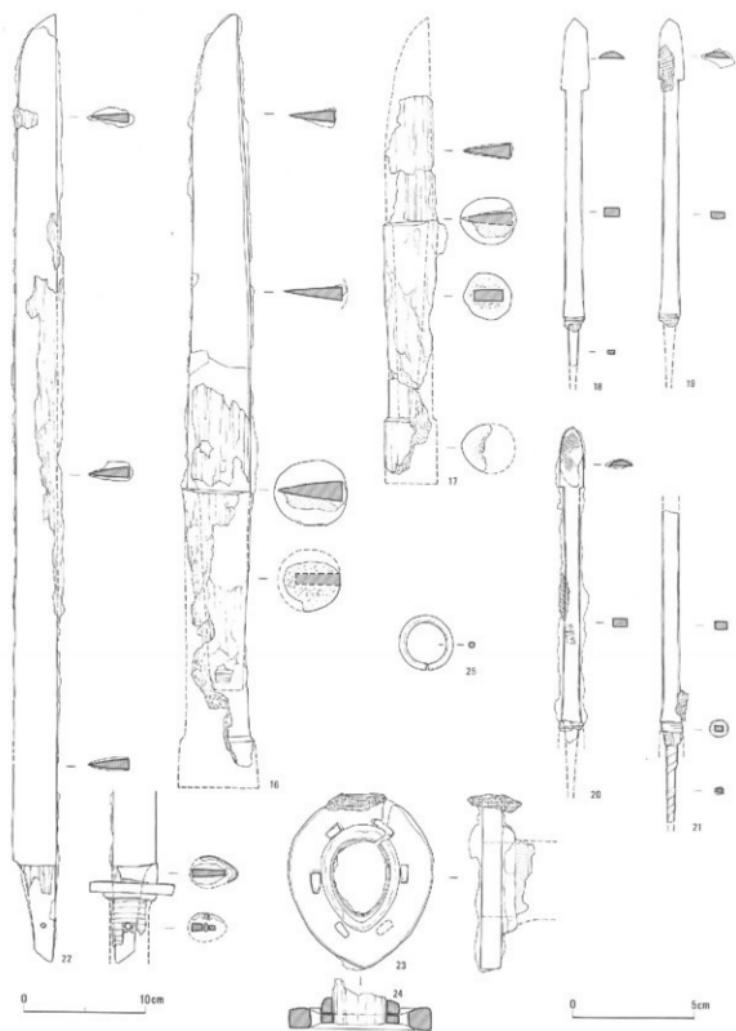
小刀（16） 刃渡り19.5cm、現長30.8cmで、柄は鹿角装で、柄頭はひとまわり太く削り出す。刃部には鞘の木質をとどめる。

刀子（17） 鹿角装で、16に類似する柄部をもつ。刃部と先端を欠き、現長は15.5cmである。

鉄鎌（18-21） 長頭鎌で、同一型式に属する。鎌身は柳葉形で逆刺はもたない。長さ2.5cm～3cm、



第31图 3号墓出土物1 (1:3)



第32図 3号墳出土遺物2 (1:2, 1:4)

幅1cmである。断面は片側が湾曲した形態を示す。頭部長は9.5cm前後で、茎には直径1cm程の矢柄の痕跡がつく。矢柄の上には樹皮を巻いている。21では茎の表面を幅3mmの植物質の紐が螺旋状に巻かれている状況が観察される。茎と矢柄との固着を目的とするものであろう。

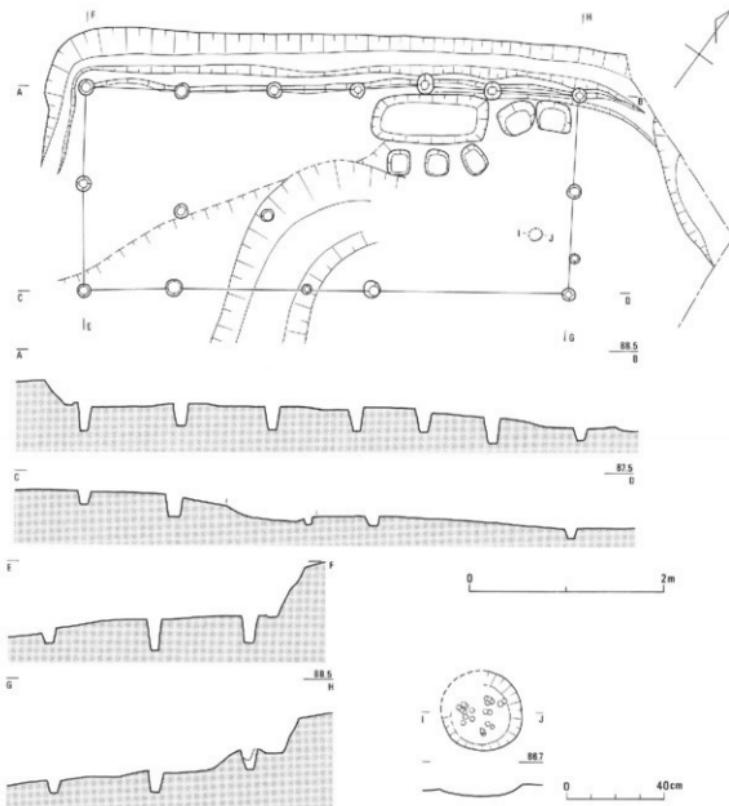
耳環 (25) 銀環で、高さ2.2cm、断面径3mmである。表面は黒く酸化している。1個しか検出され

5 中世の遺構・遺物

A 建物跡

2号墳北西部において周溝の埋没後に建てられた、6間×2間で規模にして5m×2mの掘立柱建物を検出した。この建物は斜面の山側を高さ60cm程カットして作り出した平坦面に存在している。

山側は柱間6間であるが、谷側は4間で不規則な配置となっている。柱穴は直径20cm弱、深さは山側で30cm程度である。谷側の柱穴はそれよりも浅いものが多いが、これは当時の地表面が削られているためと思われる。また、山側にはこの建物を取り囲むように浅い溝が巡っている。建物の北側の隅には120cm×50cmの方形の掘り込みが1つ、30cm×30cm程度の方形の掘り込みが5つ存在しているが、これらの性格は不明である。



第33図 建物跡・土坑実測図 (1:50, 1:20)

建物東側の溝では直径30cm、深さ5cm程度の深い掘り込みが存在し、その中から銅錢が26枚あまり出土した。出土錢の詳細については別表のとおりである。

この建物の時期であるが、出土錢から考えてみると年代の下限は12世紀初頭となっている。ところがこの建物に隣接する2号墳の石室埋土からも銅錢が出土しており、その下限は13世紀半ばとなる。2号墳出土の銅錢は、その位置関係から見てこの建物と一連のものであるという可能性の非常に高いものであり、その年代観からもこの建物は13世紀代のものであると推定できよう。

B 出土遺物（第34図、表1）

建物跡を検出する過程で微量の土器片と、先述した土坑から錢貨が出土した。また、建物跡の下方に位置する2号墳の横穴式石室内から錢貨が、石室周辺から少量の上器が出土している。後者も建物跡に示される居住に関連するものと考えられる。これらの他に建物跡近辺から鉄釘が出土した。

1. 錢 貨 建物跡から26枚以上、石室から32枚の銅錢が出土した。いずれも輸入銭で唐代の開元通寶（621年初鑄）を最古とし、淳祐元寶（1241年初鑄）がもっとも新しい。いずれも主体をなすのは北宋銭で、石室からは開禧通寶や淳祐元寶といった南宋銭がわずかに出土している。これらの錢貨が埋納または残された時期については、最新銭である淳祐元寶の初鑄年が上限となる。

2. 土 器 建物跡からは土師器の壊類の可能性がある破片が出土しているが、小片で図示できない。2号墳石室周辺から出土したのはいずれも破片だが、須恵器、備前焼、瓦質土器、土師器がある。小片のため図示できないものがほとんどなので、以下、種類別に概略を記す。

須恵器は、勝間田焼の壺と思われる口縁部片等があるが、勝間田焼に通常みられる格子目タタキを胴部にもつものは認められず、量も少ない。壺・壺・皿類は存在しない。備前焼にはすり鉢の破片と盃または壺とみられる胴部片がある。瓦質土器の器種は鍋に限られ、外方に屈曲して直立する口縁のものと、鉢をもち内径して立つ口縁の2種がある。土師器には壺と皿がある。壺は底部をヘラ切りするもので、口径約13cm、高さ3.2cmほどに復元できる個体がある。皿は、ヘラ切りした径7.3cmの底部に短い立ち上がりがつくもので、口径9.3cmである。これらのほとんどは烟地造成などによって二次的に堆積したものだが、基本的には建物が残された時期に属すると考えられる。

| 錢貨名 | 初鑄年 | 石 室 | 建物跡 | 合 計 |
|------|------|-----|-----|-----|
| 開元通寶 | 621 | 1 | 3 | 4 |
| 太平通寶 | 976 | 0 | 1 | 1 |
| 咸平元寶 | 998 | 1 | 0 | 1 |
| 祥符元寶 | 1008 | 1 | 0 | 1 |
| 天聖元寶 | 1023 | 2 | 0 | 2 |
| 皇宋通寶 | 1039 | 1 | 1 | 2 |
| 熙寧元寶 | 1068 | 1 | 0 | 1 |
| 元豐通寶 | 1078 | 1 | 3 | 4 |
| 元祐通寶 | 1086 | 1 | 1 | 2 |
| 元符通寶 | 1098 | 0 | 1 | 1 |
| 聖宋元寶 | 1101 | 1 | 1 | 2 |
| 大觀通寶 | 1107 | 2 | 0 | 2 |
| 政和通寶 | 1111 | 2 | 0 | 2 |
| 開禧通寶 | 1205 | 1 | 0 | 1 |
| 淳祐元寶 | 1241 | 1 | 0 | 1 |
| 不 明 | | 16 | 15+ | 31+ |
| 合 計 | | 32 | 26+ | 58+ |

表1 出土銅錢一覧表



第34図 出土銅錢撮影

IV まとめ

1 古墳の築造と埋葬時期

的場古墳群は前章で述べたように、ほとんどが埴輪施設に横穴式石室をもつ。美作地方における横穴式石室の初現は、津市市福田に所在する中宮1号墳⁽¹⁾で、片袖式の石室には石材を横長に多用し、持ち返りによる特徴的な石室形態をもっている。中宮1号墳出土の須恵器は、陶器編年のTK10型式にはほぼ併行する時期のもので、築造はおおむね6世紀の中頃と推定される。ほぼ同時期に属するものとしては真庭郡八束村四ツ塚1号墳⁽²⁾や落合町神毛1号墳（福井山古墳）⁽³⁾が存在するものの、石室形態は中宮1号墳よりは新相を示し、横穴式石室をもつ古墳は当時わめて少なかったようである。

その後の横穴式石室墳の展開状況については、個々の古墳の調査事例は多いが、石室形態について編年のみがある⁽⁴⁾程度で、まだ詳細にはあとづけられていないのが現状である。のちに説明するように、的場古墳群は美作地域においても重要な位置をしめる古墳群のひとつと考えられるので、まず調査した3古墳について築造時期を検討し、以後の評価に備えることとする。

A 須恵器の年代

各古墳から出土した須恵器について坏類を土体に検討する。前章では坏の寸法と形態、そして製作手法から1類から5類までに分類した。各古墳の類別は、基本的には古墳間相互に共通するが、やや相違をみせる部分もあるので、以下整理する。

1号墳からは、1・2・3類の坏類が出土している。これらは型式学的には新旧の傾向をもつものと推定され、1類坏蓋の寸法は、口径14.3cm、器高4.8cmでb手法、坏身は口径13.1cm、器高3.9cm、a手法である。同坏身は口径13.1cm、器高3.9cm。2類坏蓋の口径は幅をもち約15cm前後、器高は3.5cmのものと4cm台後半の2者がある。すべてa手法。2類坏身は口径14cm前でa手法。3類坏蓋の口径は13cm台後半に集中する。b手法が多く、a手法も存在する。大半は口縁端部からやや離れた内面に段状の起伏をもつ特徴的な形態を示す。同坏身は口径12cm台で、a手法とb手法が半分ずつ存在し、c手法が1点だけ認められる。

2号墳出土の坏類は、4・5類がある。4類坏蓋は口径が約12.5cm、器高約4cmでb・c両手法が半々の割合でみられる。同坏身は口径約11cmで、c手法のみが存在する。5類は、口径11.8cmの坏蓋が1点存在する。特異なa手法である。

3号墳には1・3類が存在する。1類坏蓋は口径14.8cm、器高4.3cm、b手法。同坏身は口径13.1cm、器高4.5cmでa手法。3類坏蓋は口径が13.5cmから14cmに集中し、大半がa手法、一部b手法のものがある。同坏身は口径が12.5cm、器高は4cmほどで、すべてa手法である。

以上の類別のうち1類については、坏蓋口縁端部の形態や坏身口縁部の立ち上がりから3分墳の1類が1号墳の1類よりも古相を示すと考えられるが、ここでは両者を一括してとりあつかう。これらの5類別は、ほぼ連続する須恵器坏の型式として位置づけられるので、型式名としては的場I式からV式と呼びかえて使用する。製作手法との関連では、以上みてきたようにc手法がIV式に多く存在し、III式にはb手法が特徴的に存在する。同じ手法は、I式にも一部存在するものの、III式では回転ヘラ削りが天井部および底部の縁辺部に限られ、あきらかに製作工程の簡略化を示しているに対し、I式では回転へ

ラ削りの対象となる範囲が広く、明確に区別されるものである。またIV式ではa手法は存在しない。

これらの坏諸型式と、須恵器の陶邑編年⁽⁵⁾との関係については、I式がMT85ないしT K43様式、II式がT K43様式、III式がT K209様式古段階、IV式がT K209様式新段階にそれぞれ併行すると考えられる。V式はIV式よりも新しい様相をもつて、T K217様式に相当することとなり、的場1～3号墳の須恵器坏類は、6世紀後半から7世紀前葉にかけてのものと位置づけられる。坏類以外では、3号墳の無蓋高坏は出土須恵器のなかでもっとも古相を示すもので、陶邑編年のMT15様式からT K10様式にかけての高坏に相当する。したがって、須恵器年代の上限は、6世紀前葉近くまでさかのばる可能性があるということになる。

B 古墳築造と追葬

以上の須恵器年代と古墳の所属時期がどのような関係にあるのか、つぎに検討する。

1号墳では、I式坏はいずれも石室袖部の隅から他の多くの須恵器とともに出土した。このなかにはIIおよびIII型式の坏類も存在する。1号墳では出土耳環の数から少なくとも3体の埋葬が行われていたとみられる。いっぽう、須恵器には破損するものが多く、石室内が擾乱を受けていることが明らかであるが、この袖部の上器類の出土状況は比較的現状を留めていると判断される。また、石室奥から出土した坏身にはc手法をもつもの(26)が存在する。これらのことから、3型式の坏類は同時に用いられた可能性が高いとみられる。すなわち、古墳築造とそれに伴う初葬は、最新型式であるIII式の段階に行われたと考えられる。したがって、想定される追葬もほぼ同じ年代になされたこととなる。したがって、本山墳は、およそ7世紀初頭頃の築造と思われる。

2号墳においては、石室中央の陶棺が古墳の主人公である。この陶棺に供えられた坏類はいずれもIV式で、これが古墳築造時期の上限を示すと考えられる。V式の坏蓋は、石室手前の箱式石棺の近くから出土しているので、追葬の時期を示す可能性が高い。築造は7世紀前葉、追葬が7世紀中葉初頭であろうか。

3号墳は、堅穴式石室であることに加え、耳環の数からみて單葬であった可能性が高い。須恵器坏類も一度に供献された様相を示し、I式の坏類は、II式の坏類とそれぞれ組み合わされた状態で出土している。これら2型式の新しいものが、古墳築造および埋葬時期の上限を示す。したがって、本古墳はIII型式期の築造であり、須恵器の全体的な様相としては1号墳よりもあきらかに古相を示しているにもかかわらず、基本的には1号墳とほぼ同時期に造られたと判断される。

C 須恵器の使用と埋納

このようにみてくれれば、1・3号墳ではかなり長期間にわたり須恵器が伝世したこととなる。もっとも古相を示す3号墳出土無蓋高坏(13・14)が、約半世紀以上にわたり使用されていたとはやはり考えにくいので、これらについては少なくともI式の坏類と同様の時期における地方窯の様相を示す事例と考えた方がよいのかもしれない。

いっぽう、今回出土した須恵器には、かなりの長期間の使用を示すものが存在するのも事実であり、このことについて簡単に触れておく。それは須恵器にみられる使用痕の存在である⁽⁶⁾。使用痕は磨滅痕として認識できる。磨滅の度合いは高い順にA、B、Cと区分した。磨滅度Aは、ほぼ全面にわたり激しい磨滅が認められるもので、カキ目やハラ記号がすり減って稀薄になる例がある。磨滅度Bは特定部位にある程度の抜がりをもつ顯著な磨滅が認められるものである。磨滅度Cとしたのは、坏でいえば口縁部などのわずかな一部に磨滅が観察できるもので、指先でかすかに認識できるものが多い。これら

表2 1号墳出土須恵器観察表

| 番号 | 目録 | JIS | 器名 | 性状の特徴 | | 同上 | 鉢 壺 | 瓦 瓶 | 瓦 罐 | 瓦 筒 | 備考 | |
|----|------|------|------|---|---|--------------------------|--------------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------------|------------------|
| | | | | 外 壁 | 内 壁 | | | | | | | |
| 2 | 平 盆 | 14.3 | 4.8 | 大井型の三分の一を円筒へ割りする。底部に折れ足の部分の重なる痕がある。 | 口コナガ彫、仕上げナガ | 表面はより盛らぬ 底部は下げるナガ | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | ほぼ完形 17の器、廣成C | |
| 3 | 平 壺 | 14.8 | 3.5 | 大井型を圓筒へ割りする。口筒部に折れ足部分の重なる痕がある。 | 口コナガ彫整後、仕上げナガ | 底部は少し盛ら ぬ | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | ほぼ完形 廣成C | |
| 4 | 平 罐 | 15.1 | 3.6 | 大井型を圓筒へ割りする。a手付 | ヨコナガ彫整後、仕上げナガ | 底部は少し盛ら ぬ | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 14の器、廣成C | |
| 5 | 平 罐 | 15.8 | 4.7 | 大井型の約三分の二を圓筒へ割りする。a手付 | ヨコナガ彫整後、仕上げナガ | 底部は少し盛ら ぬ | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 46室の片口端片と側面 が削ぎ落とし | |
| 6 | 平 罐 | 17.7 | 4.9 | 大井型の三分の一を円筒へ割りする。a手付 | ヨコナガ彫整後、仕上げナガ | 底部は少し盛ら ぬ | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | ほぼ完形 廣成C | |
| 7 | 平 罐 | 17.8 | 4.4 | 大井型の三分の一を円筒へ割りする。b手付 | 口筒部に削落した段をとどめ る。ヨコナガ彫整後、仕上げナガ | 底部は削落した 段をとどめる | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | ハラスG、廣成C | |
| 8 | 平 罐 | 18.9 | 4.2 | 大井型の約半分を圓筒へ割りする。 a手付 | ヨコナガ彫整 | 底部は多く盛ら ぬ | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 30の器、廣成C | |
| 9 | 灰 罐 | 19.1 | 4.0 | 大井型の三分の一を圓筒へ割りする。 b手付 | 中央にスランプ状凹み、口 筒部に削落した段をとどめる。 ヨコナガ彫整後、仕上げナガ | 底部は多く盛ら ぬ | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 廣成C | |
| 10 | 灰 罐 | 21.0 | 4.6 | 大井型の約半分を圓筒へ割りする。 b手付 | ヨコナガ彫整 | 底部は多く盛ら ぬ | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 90% 完形 廣成C | |
| 11 | 灰 罐 | 23.7 | 4.4 | 大井型の三分の一を圓筒へ割りする。 a手付 | ヨコナガ彫整、口筒部付近 に凹痕がある。 | 底部は多く盛ら ぬ | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 69室の片口端片と底 部は仄成C | |
| 12 | 灰 罐 | 23.4 | 4.6 | 大井型の三分の一を圓筒へ割りする。 a手付 | ヨコナガ彫整 | 底部は多く盛ら ぬ | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 22の器、廣成C | |
| 13 | 灰 罐 | 23.2 | 4.3 | 大井型の約半分を圓筒へ割りする。 a手付 | ヨコナガ彫、口筒部付近に凹 痕がある。 | 底部は多く盛ら ぬ | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 廣成C | |
| 14 | 灰 罐 | 33.7 | 3.7 | 底部の三分を圓筒へ割りする。 a手付 | ヨコナガ彫整後、仕上げナガ | 底部は多く盛ら ぬ | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 4の器、廣成C | |
| 15 | 灰 罐 | 33.4 | 4.7 | 底部の三分を圓筒へ割りする。 a手付 | ヨコナガ彫整後、仕上げナガ | 底部は多く盛ら ぬ | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | ほぼ完形 廣成C | |
| 16 | 灰 罐 | 32.9 | 4.5 | ヨコナガ彫は無い。底部を残す。底部 の凹みを削落へ削りする。 a手付 | ヨコナガ彫整後、仕上げナガ | 底部は多く盛ら ぬ | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | ほぼ完形 廣成C | |
| 17 | 灰 罐 | 33.1 | 3.9 | 底部の三分を圓筒へ削りする。 a手付 | ヨコナガ彫整後、仕上げナガ | 底部は多く盛ら ぬ | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 2の器、一期の帶地色 有無、廣成C | |
| 18 | 灰 罐 | 33.8 | 4.8 | 底部の三分を圓筒へ削りする。 a手付 | ヨコナガ彫整 | 底部は多く盛ら ぬ | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黑色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | ほぼ完形 廣成C | |
| 19 | 灰 罐 | 33.2 | 3.6 | 豊前型のため底部を削りする。 | 同上 | 75% | 2~3mmの黄石縞 を多く含む | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 破壊不規、表面の剥落有 り |
| 20 | 灰 罐 | 33.1 | 3.9 | 豊前型のため底部を削りする。 | ヨシナガ彫整 | 75% | 2~3mmの黄石縞 を多く含む | 外表面黒色、 内部赤褐色 | 外表面黒色、 内部赤褐色 | 外表面黒色、 内部赤褐色 | 外表面黒色、 内部赤褐色 | ほぼ完形 廣成C |
| 21 | 灰 罐 | 11.9 | 4.0 | 底部の三分の一を圓筒へ削りする。 a手付 | ヨシナガ彫整 | 底部は多く盛ら ぬ | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | ほぼ完形 廣成C | |
| 22 | 灰 罐 | 31.9 | 4.2 | 底部の三分の一を圓筒へ削りする。 a手付 | ヨシナガ彫整 | 底部は多く盛ら ぬ | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 12の器、廣成C | |
| 23 | 灰 罐 | 31.8 | 4.0 | 底部の三分を圓筒へ削りする。 a手付 | ヨシナガ彫整後、仕上げナガ | 底部は多く盛ら ぬ | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 津波完形 廣成C | |
| 24 | 灰 罐 | 32.0 | 3.9 | 底部の三分を圓筒へ削りする。 a手付 | ヨシナガ彫整後、仕上げナガ | 底部は多く盛ら ぬ | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 津波完形 廣成C | |
| 25 | 灰 罐 | 12.7 | 4.6 | 底部の三分を丁寧に圓筒へ削りする。 a手付 | ヨシナガ彫整後、仕上げナガ | 底部は多く盛ら ぬ | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 津波完形 廣成C | |
| 26 | 灰 罐 | 12.7 | 3.6 | 底部は圓筒へ削り後、ナガ彫整 を施す。a手付 | ヨシナガ彫整後、仕上げナガ | 底部は多く盛ら ぬ | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 津波完形、圓筒方式へ替 り | |
| 27 | 灰 罐 | 12.6 | 4.0 | 底部の三分の二を圓筒へ削りする。 a手付 | ヨシナガ彫整後、仕上げナガ | 底部は多く盛ら ぬ | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 津波完形 廣成C | |
| 28 | 灰 罐 | 13.0 | 3.41 | 不明 | 器名の判別のため調査等不明 | 小判 | 2~3mmの黄石縞 を多く含む | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 界面剥離層有 り |
| 29 | 灰 罐 | 12.7 | 3.6 | 底部の三分を丁寧に圓筒へ削りする。 a手付 | ヨシナガ彫整、底面ナガ仕上 | 底部は多く盛ら ぬ | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 75% 完形 廣成C | |
| 30 | 灰 罐 | 12.8 | 4.4 | 底部は三分の二を圓筒へ削りする。 | ヨシナガ彫整 | 底部は多く盛ら ぬ | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 8の器、廣成C | |
| 31 | 水井型 | 14.5 | 5.0 | 水井型の三分の一を圓筒へ削 りし。その上にナガを施す。 | ヨコナガ彫、底面ナガ仕上 | 底部は邊に落ちる。水井型 は上位ナガを施す | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | ほぼ完形 廣成C | |
| 32 | 共頭全蓋 | 12.0 | 5.0 | ヨコナガ彫、大井の約三分の二を 横穴式で作る。裏面にハメ穴で封 火穴を設ける。 | 水井型は上位ナガを施す | 底部は上位ナガ を施す | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 津波完形 | |
| 34 | 共頭全蓋 | 10.5 | - | ヨコナガ彫整 | ヨコナガ彫整 | 不規 | 底部の底面を含む | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 底10以上 |
| 35 | 灰 罐 | 15.0 | 17.3 | 柄部とは持手を倒して、蓋合す る。 | 同上 | 小判 | 2~3mmの黄石縞 を多く含む | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 灰色、黒色小 斑点 | 90% 完形 廣成C |
| 39 | 無蓋北山 | 11.8 | 16.8 | 側面に焼けた痕があり、口縁部ハ タケニ真に2つ孔があり、底盤部面 へ落書き状の画文 | 同上 | 同上 | 同上 | 同上 | 同上 | 同上 | 同上 | 同上 |

表2 1号埴出土須恵器観察表(続)

| 番号 | 古稱 | 口径 | 鉢内 | 経年の特徴 | | 留板 | 粘 土 | 色 滅 | 成存率 | 備 考 |
|----|------|------|------|---|-----------------------------|----|------------------|-----------------|-------|-----|
| | | | | 外 壁 | 内 面 | | | | | |
| 40 | 蓋 | 16.9 | 27.5 | 体部は厚手の土で、半球を保つ。内面は滑らかで、手に滑る。蓋部には2つの凹部を有し、3段式とした仕様を示す。 | 蓋部底には横円形の凹部を残し、3段式とした仕様を示す。 | 不明 | 2 mm以下の長石角礫を含む | 褐色を帯びた灰褐色。一部黒色。 | 60 % | 電風出 |
| 41 | 鏡 瓶? | 7.0 | - | | | 不明 | 2 mm以下の長石角礫を多く含む | 黒灰色 | 口 鏡 部 | 遺風B |
| 42 | 瓶? | - | - | 肩部と半身をカット状にする。 | ココナガ調整 | 不明 | 3 mm以上の長石角礫を多く含む | 灰褐色 | 側 頭 部 | |
| 43 | 环 瓶? | 13.2 | - | | 口縁部に著化した段をとどめ | 不明 | 2 mm以下の長石角礫を含む | 褐灰色 | 口縁部 | |
| 44 | 环 瓶? | 13.8 | - | | * | 不明 | 2 mm以下の長石角礫を含む | 褐灰色 | 口縁部 | |
| 45 | 环 瓶? | 13.9 | - | | * | 不明 | 2 mm以下の長石角礫を含む | 褐灰色 | 口縁部 | |

表3 2号埴出土須恵器観察表

| 番号 | 古稱 | 口径 | 高さ | 経年の特徴 | | 留板 | 加 工 | 色 滅 | 成存率 | 備 考 |
|----|------|------|------|---|------------------------|----|------------------|-----------------------|----------|--|
| | | | | 外 壁 | 内 面 | | | | | |
| 4 | 环 瓶? | 11.8 | 3.8 | 又舟記の約半分位の高さ、半球を保つ。内面は滑らかで、手に滑る。一概に成存不良。a手付 | ココナガ調整後。底альноアーチを作り上げ | 正 | 鋸齿を多く含む | 外表面灰色、内面褐色、裏面灰褐色 | 8% | 手付として施用された可能性もある。施用風 |
| 5 | 环 瓶? | 12.0 | 4.4 | 又舟記は「テ舟」後、透造部のみ周転部はヘタリ後、透造部のみ周転部はヘタリ後、チサ仕上げ。b手付 | ココナガ調整後。ナジ往上げ | 透 | 2 mm以下の長石角礫を含む | 褐灰色 | ほぼ完形 | 身とセッコトで焼成した痕跡。身の下部のみ度合が良。身側色自然緑。ハゲあり。焼成風 |
| 6 | 环 瓶? | 11.7 | 4.3 | 大舟記は「テ舟」後、透造部のみ周転部はヘタリ後、ナジ仕上げ。c手付 | ココナガ調整後。ナジ往上げ | 透 | 2 mmの長石角礫を含む | 外表面灰色、内面褐色 | ほぼ完形 | 電風出 |
| 7 | 环 瓶? | 12.7 | 4.5 | 又舟記は「テ舟」後、ナジ仕上げ。c手付 | ココナガ調整後。中央部を斜めに削り下げる | 透 | 2 mmの角礫を少量化 | 外表面灰色、内面褐色 | 44% 完形 | 焼成や不良。調査C |
| 8 | 小 瓶? | 12.6 | 4.4 | 又舟記は「テ舟」後、ナジ仕上げ。c手付 | ココナガ調整後。小斜面をナジ往上げ | 透 | 2 mmの無砂粒砂を含む | 灰褐色 | ほぼ完形 | 成存不良。調査B |
| 9 | 环 瓶? | 10.9 | 3.6 | 又舟記の約半分を周転部へ削り下げる。b手付 | Bコナガ削除後。ナジ仕上げ | 透 | 2 mmの角礫を少量化 | 灰褐色 | 8% | S型の部は施成版に変形する。施成B |
| 10 | 环 身? | 11.8 | 3.7 | 此部は四輪へ削り下げる。ナジ仕上げ。f手付 | ココナガ削除 | 正 | 2 mm以下の長石角礫を含む | 灰褐色 | 8% | 部分に割れている。 |
| 11 | 环 身? | 11.0 | 4.3 | 透造部はヘタリ後、ナジ仕上げ。e手付 | ココナガ調整 | 正 | 2 mm以下の長石角礫を多く含む | 一概黒灰色、内面褐色 | 透 | 電風出 |
| 12 | 环 身? | 11.0 | 4.0 | 透造部はヘタリ後、ナジ仕上げ。c手付 | ココナガ削除後。ナジ往上げ | 小透 | 2 mmの長石角礫を少量化 | 灰褐色 | ほぼ完形 | 施成や不良。調査B |
| 13 | 环 身? | 11.1 | 4.0 | 透造部はヘタリ後、ナジ仕上げ。c手付 | ココナガ調整 | 小透 | 2 mmの長石角礫を多く含む | 前面一部黒灰色、内側一部黒灰色、側面灰褐色 | ほぼ完形 | 調査C |
| 14 | 环 身? | 11.3 | 4.3 | 又舟記、四輪へ削り下げる。ナジ仕上げ。f手付 | ココナガ調整後。ナジ往上げ | 不透 | 2 mmの長石角礫を多く含む | 外表面灰褐色、側面灰褐色 | ND % | 調査C |
| 15 | 环 身? | 10.8 | 4.2 | 透造部はヘタリ後、ナジ仕上げ。c手付 | ココナガ調整 | 正* | 黄褐色の粉粒を含む | 灰褐色、内面は黒褐色 | 透 | 調査C |
| 16 | 环 身? | 10.6 | 4.3 | 透造部はヘタリ後、ナジ仕上げ。手付 | ココナガ削除後。ナジ仕上げ | 不透 | 2 mm以下の長石角礫を含む | 外表面灰褐色、内面灰褐色 | ほぼ完形 | 施成色自然始。調査C |
| 17 | 环 身? | 10.8 | 4.3 | 透造部はヘタリ後、ナジ仕上げ。f手付 | ココナガ調整後。ナジ往上げ | 透正 | 2 mmの長石角礫を少量化 | 灰褐色 | 透 | 電風出 |
| 18 | 环 身? | 10.6 | 3.6 | 透造部はヘタリ後、ナジ仕上げ。c手付 | ココナガ調整後。ナジ往上げ | 不透 | 長石斑点を多く含む | 灰褐色 | 透 | 調査B |
| 19 | 無蓋瓶? | 10.1 | 11.7 | 透造部は2枚3万透しし、外縁には2枚の突起を残す。時に目立つ突起がある。 | 透造部はココナガ削除後。底面をナジ往上げ | 不透 | 無砂粒砂を含む | 外表面灰褐色、一部黒褐色、内面褐色 | 成存不良。調査C | |
| 20 | 無蓋瓶? | 14.8 | 13.0 | 口縁部に直角の段をもつ | 透造部はココナガ削除後。底面をナジ往上げ | 正? | 2 mm以下の長石角礫を含む | 一概黒灰色、他の是灰褐色 | ほぼ完形 | 焼成地盤に埋没して、着色B |
| 21 | 馬首瓶? | 14.0 | 14.2 | 透造部は直角の内縫を施す | ココナガ後。ナジ仕上げ | 正 | 2 mm以下の長石角礫を含む | 一概黒灰色、他の是灰褐色 | 透 | 電風出 |
| 22 | 馬首瓶? | 14.8 | 15.1 | 透造部直角に縫をもつ | ココナガ後。ナジ往上げ | 不透 | 2 mm以下の長石角礫を含む | 一概黒灰色、他の是灰褐色 | 透 | 底部に汚く透成不良。調査B |
| 23 | 馬首瓶? | 13.5 | 15.2 | 透造部直角は透造部へ削り下してココナガ調整 | ココナガ後。ナジ往上げ | 正 | 2 mm以下の長石角礫を多く含む | 一概黒灰色、他の是灰褐色 | 透 | 調査C |
| 24 | 無蓋瓶? | 12.2 | 11.1 | 内縫に荷物の名前が残る。2条も蓋をもつ | ココナガ削除 | 小透 | 2 mmの長石角礫を含む | 半灰褐色 | 光 | 調査C |
| 25 | 無蓋瓶? | 9.3 | 8.5 | 内縫に1条の留板を施す | ココナガ削除 | 不透 | 2 mmの長石角礫を少量化 | 透灰褐色 | 90 % | 透成B |
| 26 | 直 瓶? | 2.7 | 20.6 | 肩部に2枚の底縫を送らし、腰部下には2枚の口縫を送る。 | ココナガ調整、成り立 | 透 | 2~3 mmの長石角礫を多く含む | 灰褐色、一部黒褐色 | 透 | 調査C |
| 27 | 通 | 10.7 | 14.7 | 製造は2枚の底縫を送らし、腰に2枚の内縫を送る。内縫は2枚を組み立てる。 | ココナガ調整、成り立 | 透 | 2~3 mmの長石角礫を多く含む | 透 | ほぼ完形 | 調査B付材、調査B |
| 28 | 筒 瓶 | 6.0 | 14.2 | 体部表面に大きな目立つを施す。紀伊や窓心はもたらす。 | 片唇を拡げ丁寧に封じる | 不透 | 長石斑点を含む | 外表面灰褐色、他の是灰褐色、内面褐色 | 70 % | 焼成窓面由来で焼成して片唇で凸凹、窓心は自然色、内面褐色 |

表3 2号墳出土須忠器観察表(続)

| 番号 | 第級 | L/R | 種類 | | 形状 | 寸法 | 地 | 色 | 式番号 | 備考 |
|----|-----|------|------|---|-------------------------|-----|--------------------|---------------|-------|-----------------------|
| | | | 内 | 外 | | | | | | |
| 79 | 銀 瓶 | 3.0 | 13.4 | 筒状の内部への出し入れ封緘 に用いられる。白色系。 | ヨリナガラ瓶 | 下開き | 2mm以下の角を含む 縦断面 | 黒褐色、黑色 化粧 | 14 | はほんの では浅厚底。短込入 |
| 80 | 錫 瓶 | 10.2 | 14.8 | 筒状に口の内側を削り、製造の 過程で底部を削除する。 | 錫瓶 | 下開き | 美濃等の特徴を含む | 半灰色、黑色 化粧 | 80 % | 「」破損けりひすみ 無底 |
| 81 | 錫 瓶 | 13.8 | 15.1 | 筒状に口を削り、底部平面に錫 の付着を残す。 | ヨリナガラ瓶、錫りび | 上 | 2mm以下の底石を含む 縦断面 | 黒褐色、深厚底 化粧 | 70 % | 錫底成下底。近底部 |
| 82 | 錫 瓶 | 9.2 | 12.3 | 錫の底面に穴を開いて底面 に通じて空気を抜いたり詰め たり。会員の名前を記す。 | ヨリナガラ錫瓶、一端を切土向 きで削じる | 下 | 2~3mmの底石を含む 縦断面 | 黒褐色、底石 化粧 | 80 % | 信濃D |
| 83 | 錫 瓶 | 20.6 | 23.1 | 筒状の口を作り、上部端から右側 へと斜めに削り取る。 | 白鉛錫に黒心の口作りを必ずす る。 | 上 | 2mm以下の底石を含む | 黒褐色 | 100 % | 別て箱式B使用の一箱に 使用。最底B |
| 84 | 錫 瓶 | 16.3 | 19.1 | (刀)の蓋部分。白色系。 | ヨリナガラ瓶 | 上 | 2mm以下の底石を含む | 黒褐色 | 80 % | 近底部 |

表4 3号墳出土須忠器観察表

| 番号 | 種類 | 寸法 | 形状の内訳 | | 形状 | 寸法 | 地 | 色 | 式番号 | 備考 |
|----|-----|------|-------|----------------------------------|----------|-----|--------------------|--------------|------|---------------------------|
| | | | 内 | 外 | | | | | | |
| 1 | 环 鉢 | 11.8 | 4.3 | 筒状の内側には内側へ削り する。手作。 | ヨリナガラ鉢 | 上開き | 3mm以下の底石を含む 縦断面 | 白褐色 | 10 % | 丁の耳舟セッタ開底。 迷走やや細長。鉢底C |
| 2 | 环 鉢 | 11.0 | 4.3 | 筒状の内側の一部を削りへくり する。手作。 | ヨリナガラ鉢 | 上開き | 2mm以下の底石を含む 縦断面 | 白褐色、黑色 化粧 | 10 % | 近底C |
| 3 | 环 鉢 | 11.5 | 3.6 | 筒状の内側を全部へくり削りす る。手作。 | ヨリナガラ鉢 | 上開き | 2mmの底石を含む | 黒褐色、 半透明灰 | 10 % | 定性C |
| 4 | 环 鉢 | 11.0 | 4.1 | 筒状の内側を全部へくり削りす る。手作。 | ヨリナガラ鉢 | 上開き | 3mm以下の底石を含む | 白褐色 | 10 % | 12.000番セッタ開底。 ハゲ入り。鉢底A |
| 5 | 环 鉢 | 11.5 | 4.2 | 筒状の内側一部分を削りへくり削 る。手作。 | ヨリナガラ鉢 | 上開き | 2mm以下の底石を含む | 白褐色、 半透明灰 | 10 % | 半透明C:底内側黒化 有。鉢底C |
| 6 | 环 鉢 | 11.7 | 5.1 | 筒状の内側の一部を削りへくり削 る。手作。 | ヨリナガラ鉢 | 上開き | 2mmの底石を含む | 白褐色、 半透明灰 | 10 % | 近底C:底内側黒化 有。鉢底C |
| 7 | 环 鉢 | 11.1 | 4.5 | 筒状の内側の一部を削りへくり削 る。手作。 | ヨリナガラ鉢 | 上開き | 3mm以下の底石を含む | 白褐色 | 10 % | 1.000番セッタ開底。 迷走不規。鉢底C |
| 8 | 环 鉢 | 11.2 | 4.2 | 筒状の内側を全部へくり削りす る。手作。 | ヨリナガラ鉢 | 上開き | 2mm以下の底石を含む | 白褐色、 半透明灰 | 10 % | 鉢底C |
| 9 | 环 鉢 | 11.3 | 3.7 | 筒状の内側を全部へくり削りす る。手作。 | ヨリナガラ鉢 | 上開き | 2mm以下の底石を含む | 白褐色、 半透明灰 | 10 % | 近底C |
| 10 | 环 鉢 | 11.7 | 3.8 | 筒状の内側を全部へくり削りす る。手作。 | ヨリナガラ鉢 | 上開き | 2mm以下の底石を含む | 白褐色 | 10 % | 1.000番セッタ開底。 迷走不規。鉢底C |
| 11 | 环 鉢 | 12.1 | 4.6 | 筒状の内側を全部へくり削りす る。手作。 | ヨリナガラ鉢 | 上開き | 2mm以下の底石を含む | 白褐色 | 10 % | 鉢底C |
| 12 | 环 鉢 | 11.9 | 4.2 | 筒状の内側を削りへくり削りす る。手作。 | ヨリナガラ鉢 | 上開き | 2mm以下の底石を含む | 白褐色 | 10 % | 4.000番セッタ開底。 ハゲ入り。鉢底C |
| 13 | 試量瓶 | 11.5 | 10.6 | 内側に各所の孔を設けて置く。 内側に各所の孔を設けて置く。 | ヨリナガラ試量瓶 | 上開き | 2mm以下の底石を含む | 白褐色 | 60 % | 現用当自用。ハゲ入り。 鉢底C |
| 14 | 試量瓶 | 11.6 | 11.7 | 内側に各所の孔を設けて置く。 内側に各所の孔を設けて置く。 | ヨリナガラ試量瓶 | 上開き | 2mm以下の底石を含む | 白褐色 | 70 % | 現用当自用。漆器。ハ ゲ入り。鉢底C |
| 15 | 瓶 鉢 | 11.6 | 25.5 | 筒状の内側を全部へくり削りす る。手作。 | ヨリナガラ瓶 | 上開き | 2mm以下の底石を含む | 白褐色 | 10 % | 解説B: 鉢底C |

の観察結果を別表に示した(表2-4 備考欄)。これからいえることは、まず第1に多くの須忠器に使用痕と考えられる磨滅が観察されることで、このことは一括遺物である古墳副葬品の解釈に手がかりを与えるものと考えられる。第2には、当然のことかもしれないが器種により磨滅部位の偏在が認められることである。たとえば2号墳出土の無蓋高杯の磨滅度B例(20・21・23・25)では長脚を呈する脚台中央部分に帯状の磨滅痕が認められた。また提瓶や壺では胴部および底部に磨滅が広く進行した例がある。このことは、木製器台の使用や須忠器の使用の実態を知る手がかりとなるかもしれない。第3に本古墳群では、埋葬供獻にあたり日常的に使用された土器が用いられたことを示す点である。

現在のところ磨滅の度合いについて、共伴する型式との間に相関関係は認められないが、今後意識的に分析すべき課題であろう。

2 古墳群の特徴と問題点

A 墳丘・埋葬・遺物

1号墳の墳丘形態は不明な点も残されるが、直径13mほどの円墳と推定される。片袖式の横穴式石室で全長8.5m、玄室長4m、最大幅は1.7mである。2号墳は直径10mで、無袖式の石室規模は現長5.6m、幅1.4mと、1号墳よりやや小形である。3号墳の直径は10m、未調査の古墳のうち残りの良い5号墳の直径は約12m、石室長8.5m、最大幅は1.9mである。副葬品目においても1・2号墳には馬具が含まれていることが注意され、本古墳群は似た規模の古墳からなると考えられる。

埋葬施設の種類が異なる1号墳と3号墳の築造時期は7世紀初頭頃と推定されるので、巨視的には横穴式石室から堅穴式石室への移行期と捉えられなくもないが、1号墳奥壁はすでに巨石化の傾向を示していることから、むしろこの段階まで堅穴式石室が残存することに注目すべきであろう。

片袖式と無袖式石室の関係は、1・2号墳の築造時期の新旧が示すように、墳丘規模の大小よりも築造時期の差による可能性がある。5号墳では、無袖式石室の奥壁から3.5m手前には箱式石棺の側板らしい板石が2枚、立った状態で残っている。それより手前側には上が厚く堆積しているので、採集された陶棺片は箱式石棺の奥に主埋葬として用いられていた可能性が高い。2号墳よりも墳丘・石室の規模はやや上回るが、石室形態・埋葬形式ともに類似している。

このように考えれば、本古墳群においては陶棺の採用は7世紀前葉になって開始された可能性がある。

遺物については、2号墳における鉄滓供獻が注意される。石室前部が残存しないため、2点が鉄滓のすべてかどうか不明だが、位置関係からみて陶棺被葬者に向けた供獻であることがあきらかである。被葬者と鉄生産との関係を物語る遺物である。また2号墳の飾り馬具の出土は、本墳被葬者が後期群集墳被葬者のなかでも上位に属することを示している。

B 古墳群の立地

的場古墳群の立地する金屋地区から吉井川下流の櫛原町までの川沿いには、平地はほとんど存在しない。南下する吉井川の両岸に迫った山地と河床との間に狭い低地が部分的にみられる程度である。現在の集落は丘陵上面あるいは様辺部の、河床から相対的に高い位置に立地する。こうした傾向は金屋地区でも同様であって、平成10年の白風10号においてもこれらの集落は水没をのがれている。的場古墳群の位置する丘陵下の平地には現在のところ遺跡の存在は確認されていないが、当時においても集落立地としては不向きであったと考えられる。

では的場古墳群の被葬者集団の居住地はどこにもとめられるのだろうか。一般にこの時期の古墳群は、生活の本拠地からやや離れながらもそれを見下ろせる周辺の丘陵上や斜面あるいは山裾に多く立地したと考えられる。的場古墳群の立地と、現在の集落に示される居住地は、ほぼ一致している。しかし古墳立地の一般的な傾向からは集落と墓域の同居は考えにくいので、被葬者の生活場所は古墳群から離れた位置に想定するのが妥当であろう。現状では具体的な場所を特定できないが、対岸の見内原地区的段丘上、あるいは上流のより離れた場所であった可能性もある。

では的場古墳群の立地の意味は何か。眼下の吉井川の存在をやはり評価するべきであろう。この吉井川は近世においては佛前と美作を結ぶ基幹交通路としての役割を果たしてきた。このことは古墳時代においても同様であって、たとえば櫛原町月の輪古墳については吉井川と吉野川の合流点を見下ろす立地と舟形埴輪の出土から、水上交通と河川管理を統括した首長像が指摘されている⁽⁷⁾。

金冠地区は大きくみれば津山を中心とする盆地の末端部に、逆にいえば盆地の入口に相当する。本古墳群の被葬者についても、吉井川を利用した物資流通を含む交通関係の管理にあたった集団としての性格が想定される^[8]。ただし、そのあたりは地域集団内部においても中央政権との関係においても、月の輪古墳の被葬者とはかなり異なったものであつただろう。

註

- 1 近藤義郎編『佐良山古墳群の研究』第1冊 津山市 1952
- 2 近藤義郎『壽山原、その考古学的調査』岡山県 1954
- 3 近藤義郎『壽山原四つ塚古墳群（改訂版）』岡山縣八束村 1992
- 4 『神毛1号墳測量報告書・ムスピ山高塚調査報告書』落合町教育委員会 1969
- 5 内山敏行・大谷晃二・田中弘志『佐良山古墳群高野山根2分塚について』『古代吉備』第13集 古代吉備研究会 1991
- 6 陶器編年については以下の文献によった。
田辺川二『陶邑古窯址群』平安学園 1966
田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
山田邦和『須恵器生産の研究』学生社 1988
- 7 今井 錦「吉備における古墳被葬者の検討—金冠山古墳南石室と月の輪古墳出し粘土桶被葬者の検討—」『古代吉備』第10集 古代吉備研究会 1988
- 8 こうした性格は、津山市佐良山古墳群の中宮古墳群および高野山根古墳群についても同様に指摘される。これら古墳群が位置するのは吉井川に流入する置川沿いの東山郷である。津山盆地「世界」からみれば、この福田郷区は吉井川流域に発達した平底の南郷にあたる。しかし古墳時代においても完全に閉じた「世界」は存在しない。現国連53号線沿いの置川流域から尼川流域を経て備前に至るルートも当時から存在していたと考えられるので、この立地は少なくとも一面において的場古墳群と同様の意味をもつと思われる。

写 真 図 版

図版 1



1. 調査区全景



2. 1号墳(調査前)



3. 1号墳石室

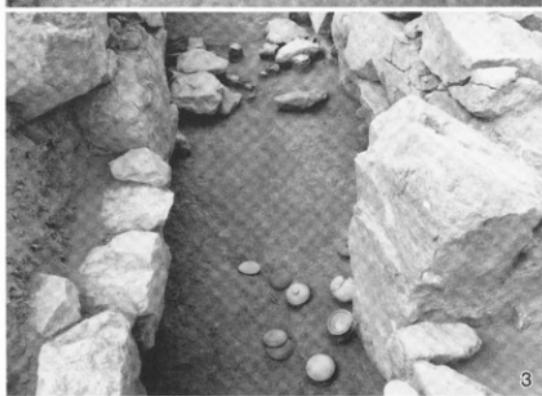
図版 2



1. 1号墳石室(北から)



2. 1号墳遺物出土状況
(北西から)



3. 1号墳遺物出土状況
(南東から)

図版 3



1. 2号墳(調査前)



2. 2号墳天井石検出状況
(北西から)



3. 2号墳石室(南東から)

1. 2号墳遺物出土状況
(北から)

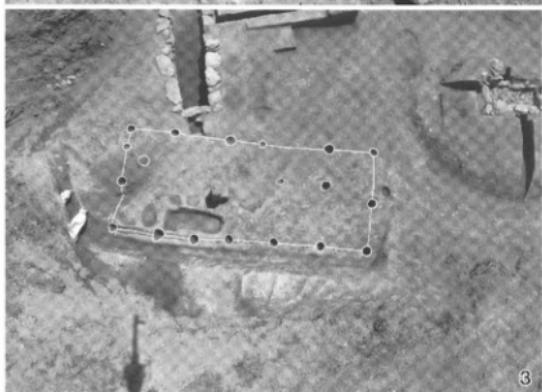


2. 2号墳箱式石棺
(北東から)

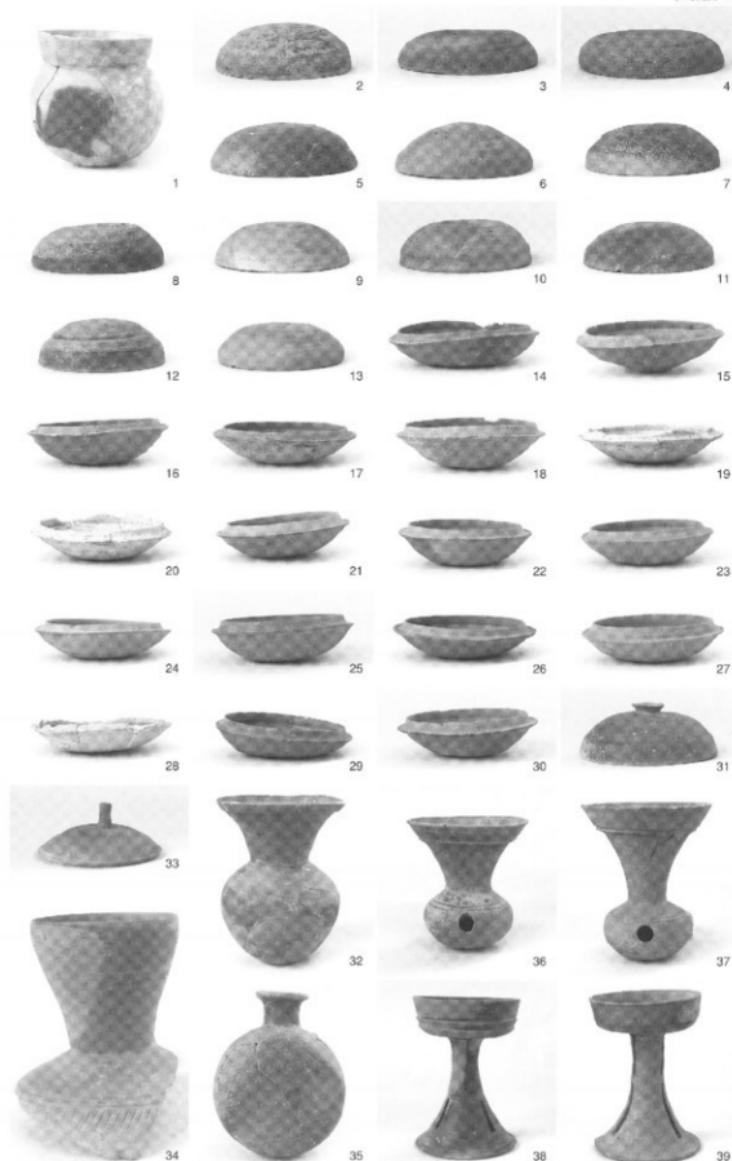


3. 2号墳石室 (南東から)



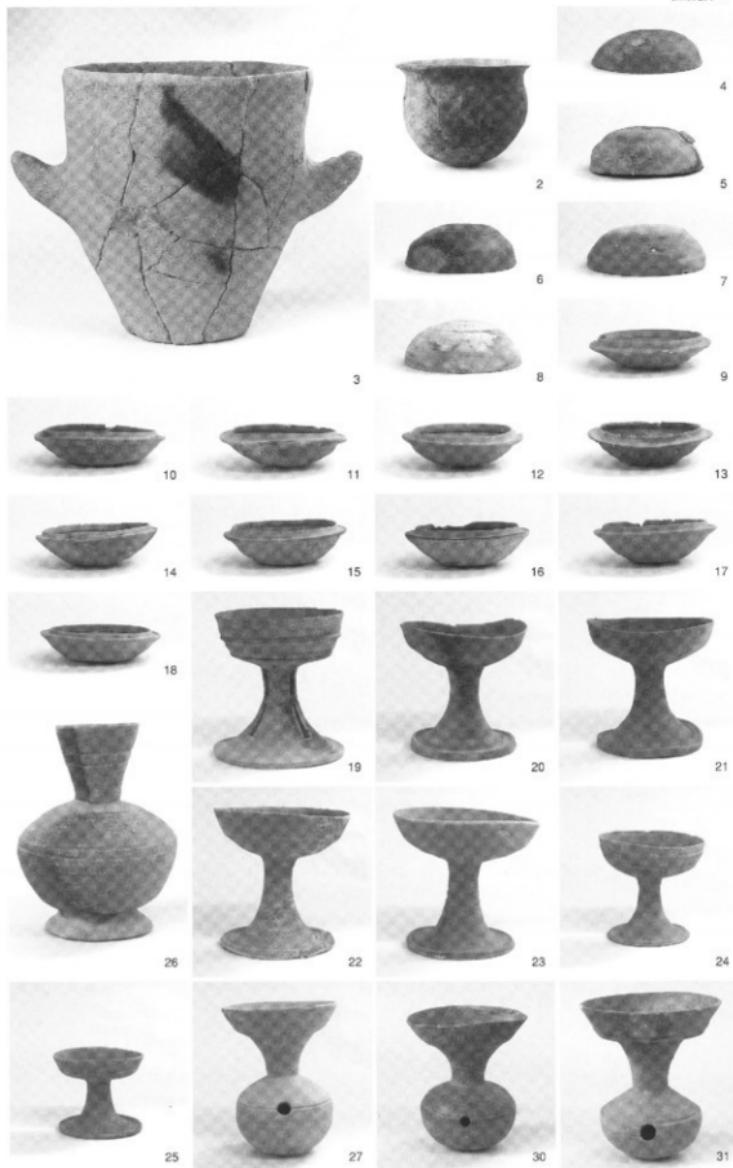


図版 6



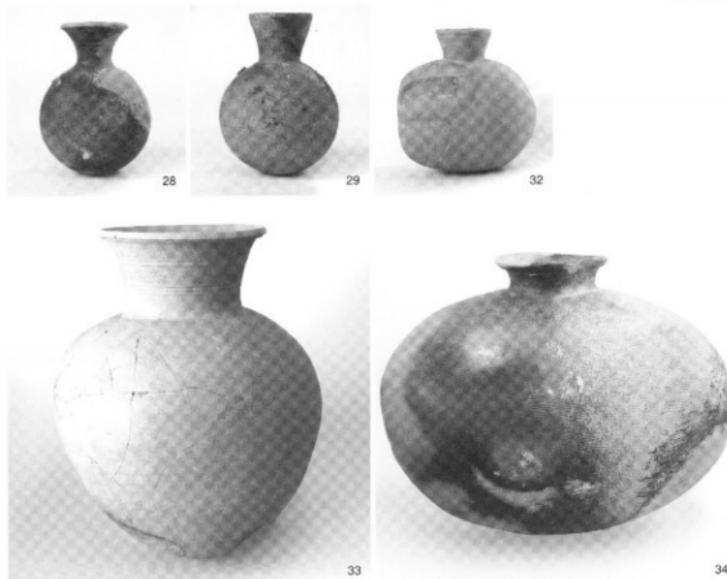
1号墳出土土器

図版 7

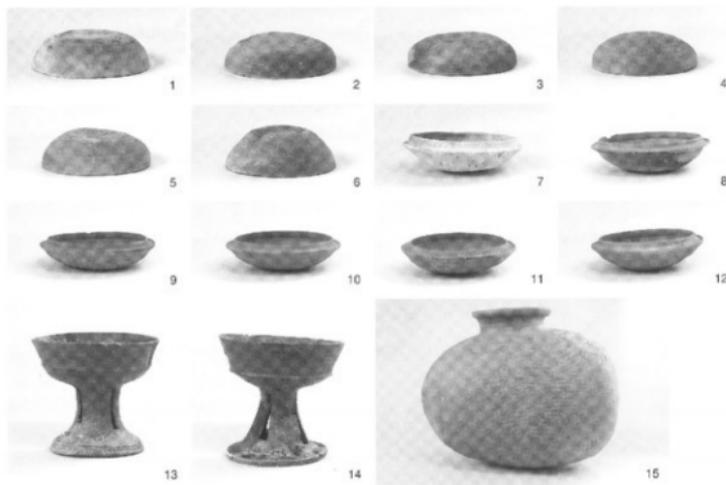


2号出土土器（1）

図版 8

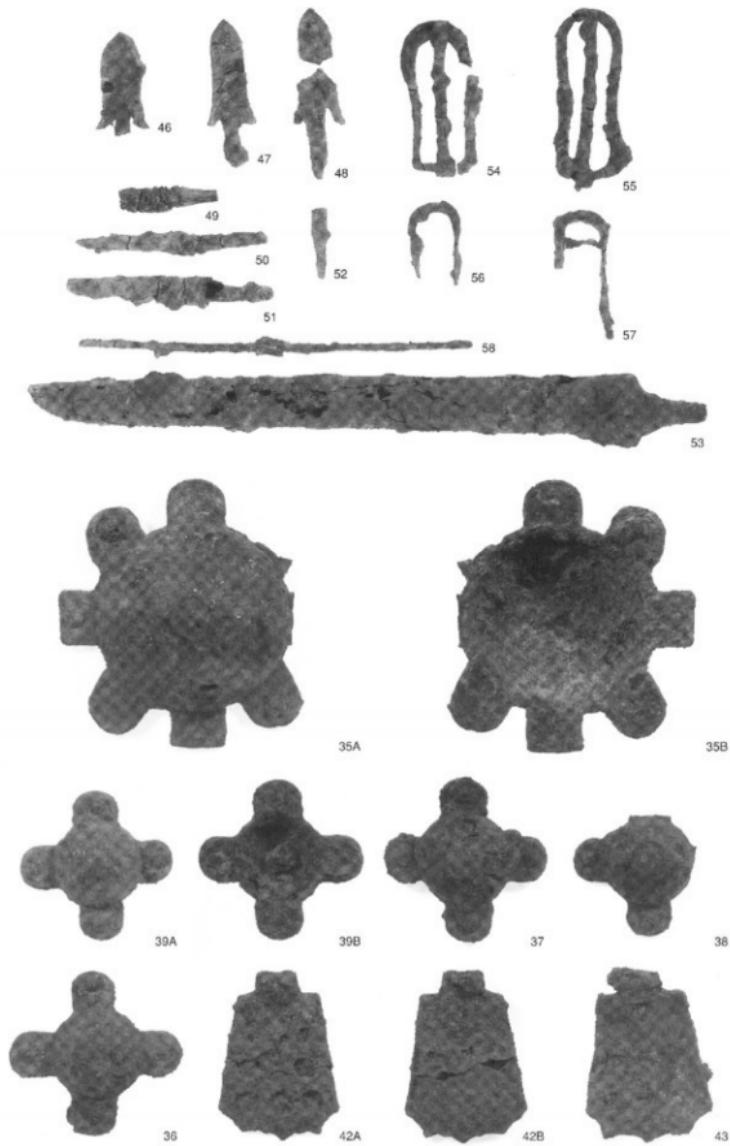


2号墳出土土器（2）



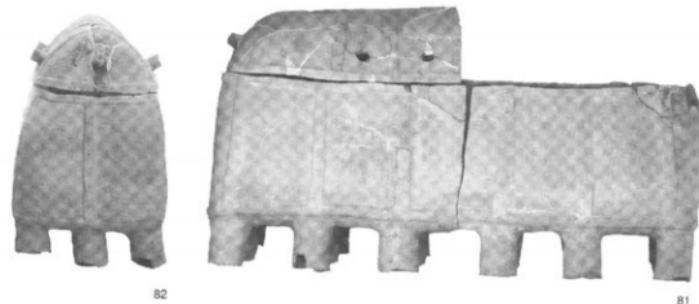
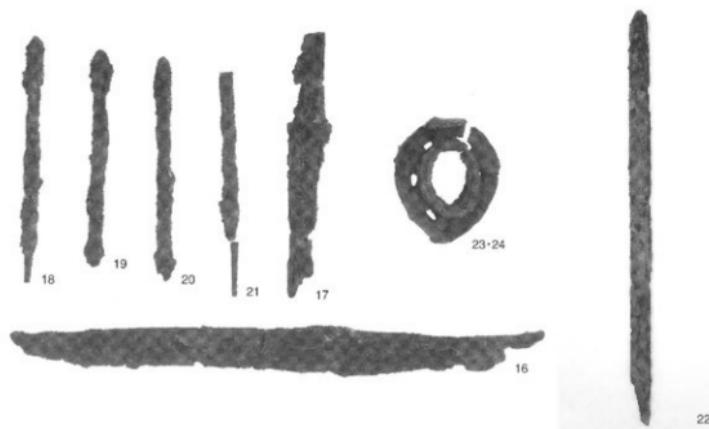
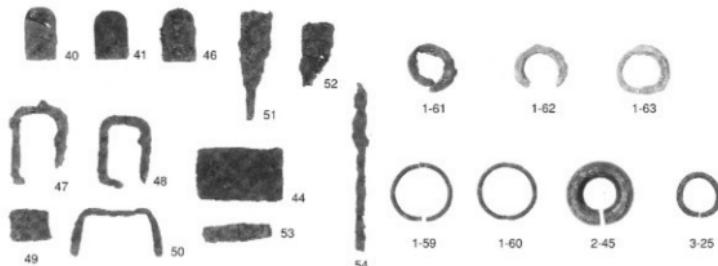
3号墳出土土器

図版 9



上段：1号墳出土鉄製品、下段：2号墳出土馬具

図版10



報告書抄録

| ふりがな | まとばこふんぐん | | | | | | |
|-------------------|--|--------------------|-----------------------|-------------|-------------------------|-------------------|------|
| 書名 | 的場古墳群 | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 津山市埋蔵文化財収納測量報告 | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第70集 | | | | | | |
| 編著者名 | 中山俊紀・安川豊史・行田裕美・平岡正宏・豊島雪絵 | | | | | | |
| 編集発行 | 津山市教育委員会 津山弥生の里文化財センター | | | | | | |
| 所在地 | 〒708-0824 岡山県津山市沼600-1 TEL. 0868-24-8413 FAX. 0868-24-8414 | | | | | | |
| 発行年月日 | 2001年3月31日 | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡 | ふりがな 所在地 | コード 市町村 道路番号 | 北緯 | 東經 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| まとばこふんぐん 的場古墳群 | まとばこふんぐん 的場古墳群 岡山県津山市 かなか 金屋367-1他 | 33203 | 35°1'50" | 134°2'2" | 1999.1.21 ~1999.4.30 | 700m ² | 牧場造成 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | |
| 的場1号墳 | 円墳 | 古墳時代 | 横穴式石室 | 土器、鐵器 | | | |
| 的場2号墳 | 円墳 | 古墳時代 | 横穴式石室 附棺1 箱式石棺1 | 土器、鐵器 鐵滓 | | | |
| 的場3号墳 | 円墳 | 古墳時代 | 竪穴式石室 | 土器、鐵器 | | | |

印刷データ

紙質 表 紙／アート紙スト220kg
本 文／ニューエイジ 90kg
写真図版／ニューエイジ 90kg
レイアウト Macintosh QuarkXPress
文字 モリサワ リュウミンL 13級・正体
団面 1200dpi
写真 カラー／175綴 400dpi
モノクロ／150綴 360dpi

的場古墳群

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第70集

2001年3月31日発行

発行 津山市教育委員会

編集 津山弥生の里文化財センター

岡山県津山市沼600番地の1

TEL. 0868-24-8413

印刷 株式会社 廣陽本社

岡山県津山市田町22

TEL. 0868 22 7221
